
日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

第8回



年間数百万という多くの日本人が海外へと向かう。
私たち日本人にとって国際社会は、ごく身近な存在となっている。
しかし、国際人として誇れる日本人はどれほどいるのだろうか？
外交一筋35年。世界を舞台に活躍した小松氏に
世界の中で尊敬される国際人のあり方について伺いました。





豊かな教養とパブリックの精神を身につけた
先駆的なリーダーを目指してほしい

外務省国際法局長

一橋大学副学長

小松一郎氏 VS 山内 進教授



小松一郎 (こまつ・いちろう)

1971年外務公務員採用上級試験合格、1972年一橋大学法学部中退、外務省入省。1983年在タイ日本国大使館一等書記官、1986年在ジュネーブ国際機関日本政府代表部一等書記官、1989年経済局国際エネルギー課企画官、条約局法規課長、1991年条約局条約課長、1993年在大韓民国日本国大使館参事官、1996年大臣官房人事課長、1998年大臣官房外務参事官(条約局担当)、2000年在アメリカ合衆国日本国大使館公使、2003年欧州局長、2005年より国際法局長。



山内 進 (やまうち・すすむ)

一橋大学副学長。専門は、法制史、西洋中世史、法文化史。北海道小樽市生まれ。一橋大学大学院法学研究科博士課程中退。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、同大法学部長を歴任して、2006年副学長就任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」拠点リーダー。著書：『北の十字軍』でサントリー学芸賞受賞。他に『掠奪の法観念史』『決闘裁判』『十字軍の思想』など。

湾岸戦争や9.11同時多発テロを体験した外交官である小松一郎氏。これからの時代に求められる人材の1つの典型ともいえます。この観点から山内進副学長が、さまざまな角度から話を聞き出しました。すると一橋大学が育成を目指す人材像と一脈通ずる、豊かな教養とパブリックの精神を備えたソートリーダー（実践的な先駆者）の姿が見えてきたのです。

マキャベリズムか 至誠で迫るか——外交の本質は？

山内 一橋大学はキャプテンズ・オブ・インダストリーの育成を標榜してきました。しかし、学部も増えてきましたし、学生たちの関心の幅も広がってきました。そこで、私たちはこれからどういう人材を育成していったらいいのかといった議論を重ねてきました。そこから生まれた人材像は、『一橋大学研究教育憲章』に謳われています。それは「豊かな教養と市民的公共性を備えた、構想力ある専門人、理性ある革新者、指導力ある政治経済人」で、キャプテンズ・オブ・インダストリーの全方位化を目指しています。

中期目標・中期計画に基づいて大学経営を行っているわけですが、そこでも「構想力ある専門人」という言葉を使っています。その中にはトップクラスの公務員も一橋大学卒業生が目指す1つの姿としてイメージされています。小松さんは、いわば構想力ある専門人と指導力ある政治経済人を兼ね備えた人です。今日のお話のなかから、どうすればこうした人材になれるかのヒントが生まれてくるのではないかと考えています。

日本にとって外交は、これまで、そしてこれからも重要です。そこでまず、外交とは何かということからお伺いしたいと思います。

小松 麻生外務大臣は、国会の外交演説で、「外交とは、はるか未来をのぞみ、国益と国民の福利を伸ばす営みです。そのためにふさわしい環境を世界に作ろうとする営々たる努力の別名です。」と述べておられます。一般には、華々しい国際会議や交渉のイメージがありますが、外交の一部にすぎません。表には見えない地味で継続的な幅広い努力がとても重要です。

国際関係の構造が大きく変わってきたこともあって、外務省だけで外交ができる時代ではなくなってきました。外務省は幅広い外交活動全般を日常業務として担当しています。それだけでは十分ではなく、国会議員や外務省以外の省庁をはじめ、企業人、専門家……を含めたオール・ジャパンで取り組まないと外交目標を達成できない時代になってきたのです。

山内 新鮮で新しい外交のイメージですね。ところで物の本には、外交の本質はマキャベリスティックなものだとあります。一方で勝海舟などは、「外交は心だ、誠実さだ」と言っています。相反する姿のように思えますが、実際にはどうなのでしょう。



小松 大きな戦略を見るか、戦術を見るかの違いではないでしょうか。戦略として捉えると、誠実と正直を基本とすることが結局長い目で見れば実を結ぶことが多いと思います。他方、個別の局面ではマキャベリスティックな外交術が必要になることもあります。

山内 グロティウスの『戦争と平和の法』に「利害だけではだめだ。一見、損をしているようでも正義を大切にすることが国民の平安の保障につながる……」といった言葉があったのを思い出しました。それでは、これまでのご経験を踏まえて、外交官とはどうあるべきとお考えですか。



小松 外交は森羅万象にかかわりますから、驚くほど幅広い分野に及びます。配属先によって必要な知識が大きく異なりますので、まずベースとしての幅広い知識の土台が重要です。常に知的好奇心を持って新たな業務に取り組むこと、そして、なによりも人と人の付き合いや、人間が好きであることが外交官には重要です。

山内 人間が好きであれば、外国人との人間関係づくりも十分にできますからね。

公務員でなくとも 頭の片隅にパブリックを

小松 語学力は必須ですが在外研修もあります。ただ、単にコトバが出来ても話す中身がなければ、すぐに底が割れます。自戒をこめて言えば、大学時代に豊かな教養を身につけ、「構想力ある専門人」になる訓練を受けることが重要だと思います。私が注目しているのは、一橋大学研究教育憲章のなかに、「市民的公共性を備えた…」とあることです。数十年先を見据えて日本国民の福利の向上を図るには、オール・ジャパンの外交が必要ですので、例えば企業の海外駐在員も外交官の一員のようなものです。

このような観点から、私が若い学生に期待するのは、「パブリック(公)」の精神を身につけることです。これは何も公務員(官)になれ

ということではありません。「公」は「官」より広い概念です。一橋大学の卒業生は、伝統的にキャプテンズ・オブ・インダストリーとして民間企業を中心に活躍してきました。経済界で活躍する人もパブリックな部分でも役立とうという精神が必要ではないかという意味です。弱肉強食の資本主義の権化のようなアメリカでもボランティアやメセナの精神など、一人一人がパブリックに奉仕し貢献しようという伝統があります。日本の若い人には、そのあたりがやや希薄なように思えます。

山内 プライベートとパブリック、「私」の部分は大事にするが、「公」はただ批判するだけという傾向が確かにあります。パブリックは自分たちがつくっていくもので、プライベートと一体不可分のものだという意識が重要ですね。

小松 「官」に対する批判はあって当然です。公務員はパブリック・サーバントであり、納税者の税金で仕事をしているのですから、常に厳しく監視し批判することを通じて、誤っているところがあれば正す必要があります。しかし、公益つまりパブリックの利益は「官」に任せて、民間は関与しなくてもいいという考えでは、いい結果は生まれません。公務員と違って民間企業で活躍している人は、四六時中パブリックについて考えている必要はないでしょう。しかし、少なくとも頭の片隅にはパブリックというものも置いておいてほしいと思います。

歴史の節目に 直接かかわれる醍醐味

山内 学生時代に外交官になろうとしたのは、どんな理由からです

か。また、実際に外交官になってみて、どこに仕事の面白みを感じましたか。

小松 なぜかと言われると……若気のいたりでしょうか（笑）。日本という国が生きていく上で国際社会との関係は切っても切れないので、国際的な仕事をしたいと考えたという単純な動機です。

私は今年で入省35年になりますが、たまたま、本省では条約や国際法関係の仕事を通算すると10年以上務めるという外務省員のなかではやや特殊な途を歩いてきました。学生時代は法曹に関心を持ったこともあります。迷った揚げ句、やはり国際的な仕事がしたいと外務省に入ったわけです。振り返ってみると、国際的な業務を主に法律的な側面から担当してきたわけで、結果として学生時代の希望が両方叶った思いです。

外務省に入ると、どんな職員でも1度や2度は歴史の節目にかかわります。たとえホンの末端であったとしても、国際社会の大きな変動に現場で関与できるということが、外交官の醍醐味といえるでしょう。

私の場合は、条約局の課長時代に湾岸戦争が勃発しました。国際社会が平和と安全の確保のために協力し合ったのですが、日本にはそのような協力活動の根拠となる国内法がありませんでした。外務省が主体となって急ごしらえの法律案を国会に提出しましたが廃案となってしまったのです。結果的には、日本は、そのための増税までして130億ドルもの資金協力を行ったのに、「トゥーリトル・トゥーレイト」と言われ、国際的に正当な評価は得られませんでした。

2000年12月にワシントンに赴任しました。折からブッシュ候補とゴア候補が大統領の座を巡って厳しい決戦の最中で、結果的にはブッシュが僅差で当選したのは記憶に新しいところです。その直後の翌年2月には、ハワイ沖でえひめ丸事件が起きました。米原潜が日本の漁





業実習船に衝突し、多数の若い犠牲者が出て、事後処理に追われました。ようやく一段落と思ったときに発生したのが、9.11同時多発テロです。このテロで、アメリカ社会全体が大きく変わりました。歴史のうねりの中にあっては小さな歯車に過ぎませんが、現場で多少なりとも関与できたことに、大きな感慨を覚えます。

山内 9.11に対する日本側の動きはいかがでしたか。

小松 当時はワシントンで政務班長の公使をしていました。ペンタゴンに飛行機が突入した、議事堂にも突っ込んだなどと、当日は情報が大変錯綜しました。しかも、そのとき日本から調査団として国会議員が数多く来訪していたのです。政務班員が議員に同行していましたが、電波が乱れたのか携帯電話も全くつながりません。初動としては、この安否確認が大変でした。その上で、アメリカ政府の状況をさぐって、日本に意見を添えて報告するというような経験を経て、2003年1月に帰国したのです。

山内 日本とアメリカとで、対応に落差を感じましたか。

小松 9.11に対する日本の対応はそれまでに比べて素早かったといえます。湾岸戦争の際に悔しい思いをした反省もあって、小泉総理がすぐ対応策を発表しました。時限立法でテロ特措法も素早くつくりました。ワシントンにいて、この対応の早さをアメリカ政府が高く評価していることがヒシヒシと伝わってきたものです。

アメリカ人にとっては9.11は大変な心理的ショックでした。その前後で、世界観がガラッと変わったほどの出来事だったのです。日本国民もテレビで惨状を目の当たりにして、テロは対岸の火事ではないと感じたと思います。とはいえ、やはり現地とは緊迫感が違うなと感じました。

PKO法が日の目を見 定着してきた

山内 湾岸戦争のときと9.11同時多発テロのときとは、日本人のものの考え方というか世論が大きく変わってきましたね。

小松 大きく変わりましたね。湾岸戦争のときにはPKOと多国籍軍の後方支援を可能とする法案を外務省が提出しましたが、廃案になってしまいました。その後、海上自衛隊の掃海艇を派遣してベルシャ湾の機雷処理で高い評価を得たことなどが契機となって、日本も世界の平和と安全に寄与する必要があるという認識が高まってきました。数年がかりでPKO法を成立させ、カンボジアやゴラン高原などで自衛隊が活躍するようになって、次第にPKO法が戦争のためではなく平和のためのものだという理解が世論に定着してきたのです。

山内 その一端を外務省は担ったわけですね。

小松 湾岸戦争の際に提出した法案は外務省が主管して提出し、廃案になりました。次のPKO法案のときには、「これは内閣全体の課題だ」という認識から、各省から精鋭を集めて内閣官房にチームを作って法案を提出したのです。



山内 面白い話ですね。オール・ジャパンで日本をあげて外交の歴史をつくってきたのがよくわかります。

自由・民主主義・市場経済などの 普遍的価値を重視する「価値の外交」

山内 外交には変化があることはと思いますが、日本外交を貫いている特徴はどこにありますか。

小松 これも麻生外務大臣が外交演説でおっしゃっていることですが、戦後の日本外交には3つの柱がありました。日米同盟、国際協調、近隣アジア諸国の重視という3本柱です。



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

これに、自由、民主主義、市場経済、法の支配などの普遍的価値を重視するという4本目の柱を加えることが打ち出されています。普遍的価値を共有する欧米諸国などと手を携えて、ユーラシア大陸の外周で孤をなす「自由と繁栄の孤」をつくることを目指しています。

山内 外交官を目指す人には、この基本的な価値観を重視する姿勢が欠かせないというわけですね。

小松 外交は大変幅広いものです。私がお話ししたことはほんの限られた側面です。例えば、外務省の同期生で経済局長から最近大使になった男がいます。彼は、欧米等との厳しい経済交渉に使うための「闘う統計」の重要性を強調していました。どういう切り口で統計資料を料理すれば日本の主張を補強できるかを、日ごろから工夫して部下にデータづくりの指示をしていました。外交では、私の担当している法的な側面だけでなく、このようなことも大変重要です。一橋大学は経済関係に昔から定評がありますが、経済を学んだ人が外交で活躍する場はたくさんあります。

外交官という職種に要求される仕事の間口はとても広いのです。部署が変わると全く新しいことを一から勉強しなければなりません。それだけに、豊かな教養を基礎にした旺盛な知的的好奇心が必要です。自分の専門分野を柱にして、その柱を抛り所にして他分野もどん欲に勉強していく姿勢が重要です。

もっと日本という国に 自信を持ってほしい

山内 大学に対する要望はありますか。

小松 自分の経験に照らせば、学生時代の勉強不足を職場でのトレーニングで補い、育てて頂いたという思いがあります。このような観点から、繰り返しになりますが、新しいものを勉強する土台となる豊かな教養を大学で身につけさせてもらいたいですね。旧制高校の教育を受けた外務省の先輩に接して、このような勉強の幅が違うと思いました。自分の柱をしっかりと持っている人は、やはり強いのです。

山内 先輩として一橋大学の学生には、どんな存在であってほしいと考えていますか。

小松 社会科学の総合大学であり、学生数も少ない大学です。教育環境としては非常に恵まれています。ジャンルを問わず、さまざまな分野で活躍してもらいたいですね。今や、国際社会とまったく関係ない職場はほとんどありません。企業なら企業で頑張ってもらいたいです。バブリックの観念も忘れないでほしいと思います。それが、オール・ジャパンの外交力に、直接間接につながってくるからです。

もう1つ言いたいのが、日本という国についてもう少し自信を持ってほしいのではないかとということです。

帝国主義の時代に、日本は欧米列強による植民地化をのがれるため大変な苦勞をしました。第一次世界大戦後のパリ講和会議で日本は国際連盟規約に人種差別撤廃条項を盛りこむよう求めました。この提案は否決されましたが、今やどの国も人種平等を否定できない時代になりました。日本は、この面では、国際社会におけるマーティン・ルーサー・キングだといってもいいほどです。

日本の戦後の繁栄は、自由貿易のルールの恩恵を受けたことが大きいといわれますが、日本が自由貿易のグローバル・ルールにフルに均霑した期間は意外に短いのです。というのは、1955年に日本がG A T T加盟を認められると多くの国がG A T T不適用を規定した35条を採用したからです。今や忘れられがちですが、長らく日本の経済外交の最大の目標は35条対日援用撤回でした。長い交渉の末、35条の対日援用が完全になくなったのは何と1995年のW T O発足時です。

このような日本の先駆者としての苦勞によって地平が開かれ、後に続いたアジア諸国は日本のような苦勞をすることなく自由貿易のルールを享受することができたのです。このようなことは、もっと広く知られてもいいのではないかと思います。

メジャーリーグでイチローや松井秀喜をはじめ多くの日本人選手が活躍していますが、その先駆者として単身渡米してさまざまな苦難を乗り越えて新人王になり、日本人がメジャーリーグで通用することを示した野茂英雄の果たした役割は偉大だと思います。これには、近代化以降の日本が国際社会で果たしてきた役割と通ずるものがあります。

一橋大学には、各分野でソートリーダー（実践的な先駆者）となるような人材を育ててもらいたと思います。

山内 それこそ『憲章』が謳っている「理性ある革新者」ですね。一橋大学は、これからも社会の要請に応じて、時代にふさわしいリーダーを輩出していかねばなりません。本日は示唆に富んだお話をいろいろ聞かせていただきまして、ありがとうございました。





新入生へのメッセージ

一橋大学のレーゾン・デートルを改めて考えてみました



一橋大学長
杉山武彦

Takehiko Sugiyama

知的な基礎体力あってこそその 個性と自由闊達な活躍

新入学生のみなさんの入学を心から歓迎いたします。昨今では、大学や大学生に対する社会の要請は、ますます厳しくなっています。例えば、社会ですぐに役立つ知識や技能を求める声や社会規範を守るといった基本的な心構えを指導するといった要望があります。前者については、授業をより実質的なものにするように工夫しています。ただし、後者については、果たしてそれが大学で時間を使って教えるべきことかという、ちょっと違うようにも感じられます。ルールやマナーは、早い段階から家庭や学校を含め社会全体で教えるべきことです。

では、大学では何を学べばいいのでしょうか。学生個人からアドバイスを求められれば、国際社会で活躍するための基本ツールとしての語学と情報化社会で能力を発揮するために欠かせないITリテラシーを身につけるように奨めます。

しかし、視点を広げて考えると様相が変わってきます。英語やパソコンが全く使いこなせなくとも、素晴らしい知識や技術により国際社会に大きな貢献をしている人はいくらでもあります。むしろ、多種多様な能力を持った人間が、それぞれの個性を発揮しながら自由闊達に活躍することが、社会全体

の活力を生んでいるのです。

この2つは決して矛盾しません。自由にのびのびと個性を発揮して活躍するためには、前提があるからです。スポーツでは、ルールを覚え、そのスポーツに必要な基礎体力をつけることによって、高度な技を自由自在に発揮できるようになります。同様に、社会で自由に活躍できるようになるためには、基礎体力が必要です。それが語学であり、ITリテラシーであり、大学で学ぶ教科なのです。大学では熟考されたカリキュラムで授業を通じて知能の基礎体力が身につくように工夫しています。これが飛躍のステップになるのです。

「学生は休暇中に作られる」。亡くなった山田欽一教授は、小平学報にこんな表現を残されました。授業で基礎体力をつけるのは、すべての学生が共通して行うことです。では、大学の長い休み中に何をするか。これは、人それぞれです。人と違う何かを行う中からその人の強みや特徴、個性が生まれるわけです。

「キャプテンズ・オブ・随処！」こそ グローバル・リーダー

一橋大学では、キャプテンズ・オブ・インダストリーが建学の精神になっています。次世代のリーダー育成こそ、一橋大学

のレーゾン・デートルと言ってもいいでしょう。しかし、1つのリーダー像に向けてみんなが一斉に走り出すというのは、かえって不自然です。大学では一人一人がそれぞれに思案し、自由に好きな目標を立てて突き進めばいいのではないかと考えています。

如水会の江頭会長は、「随処に主となる」という臨済録の言葉を座右の銘とされています。江頭会長の解釈は、「主体的に行動し、周囲のことを理解して、どうしたら人のためになるかを考えて実行すれば、おのずと責任ある立場に押し出され、リーダーになる」ということで、私はこの解釈が気に入っています。

「アジア・ナンバーワン、世界オンリーワン」大学を標榜している一橋大学では、グローバル・リーダーを輩出し続ける学府としての存在感を高めようとしています。

グローバル・リーダーとは、国内外、分野、レベルを問わず、それぞれの場で的確なリーダーシップを発揮できる謙虚で魅力的な人間のことだと、私はイメージしています。

強いトップダウンで物事を遂行するリーダーも必要ですが、逆にボトムアップを適切に誘導できるリーダーがあってもいいのです。異なる能力を持った人が、異なる分野と異なるレベルで、それぞれに能力を発揮して、グループや組織を牽引し、また支える。これもリーダーシップなのです。まさに、「随処に主となる」です。

縁あって一橋大学で学んでいる学生のみなさんには、多種多様な世界で多様なリーダーに育っていただきたいと思います。目指すは、キャプテンズ・オブ・インダストリーを拡大した「キャプテンズ・オブ・随処!」。自分のことや目先のことばかりでなく、もう一段高い視点と高い志を持って社会に貢献するリーダーになっていただきたいと思います。(談)



学生が優れた人材として成長する場が大学であると同時に、こうした人材が育つ場として常に成長しつづけてはなりません。世界の中の一橋大学としてその地位を確たるものにするために、杉山学長は、一橋大学運営指針をステートメントとしてまとめました。

学長ステートメント (要約)

一橋大学の研究・教育および 組織運営の諸課題と それらに対する取組みについての 基本的な考え方

一橋大学の使命と大学運営方針

一橋大学の研究教育の使命は、①新しい社会科学の探求と創造、②国内・国際社会への知的・実践的貢献、③構想力ある専門人、理性ある革新者、指導力ある政治経済人の育成、にある。この理念の下に、21世紀の国際社会を先導する知的資産の創造とそれに基づく社会貢献に邁進する。

今日の高等教育が置かれている「競争と評価」の枠組みの中で本学が確固たる競争力を確保するよう、人的および財的資源を最適に配分し活用する経営努力を行う。

研究

人文社会科学分野における卓越した知の集積の場、格段の高みに立つ国際的研究拠点として、内外の教育研究機関・産業界・官界に人文社会科学の知を提供するセンター、国際的共同研究ネットワークのハブとなる。その実現に向けて、優れた人材を招聘する体制づくり、若手研究者やプロジェクトリーダーが研究に専念できる条件づくりを強力に推し進める。また、世界への情報発信の実現に向けて、研究成果の英語による公開、海外での研究成果の発表活動等を奨励し支援する。

教育

教育においては、ゼミナール制度に象徴される対話と双方向のコミュニケーションを基軸とした全人的教育、全学により担われる共通教育および4年一貫教育、学部を越えた自由で多様な勉学機会の提供など、本学が培ってきたこれまでの教育の基本姿勢を堅持する。その姿勢の下に、豊かな教養に裏打ちされた、創造性と論理性、構想力と判断力を持つ21世紀のグローバルリーダーとなる人材の育成を目指す。

さらに、大学院重点化大学として、より高次の専門的知識を備えた

職業人の育成にも努める。国際化に対応し得る高度なスキルと教養の効果的な獲得を目指して国際的に通用するカリキュラムを策定し、明確なアドミッション・ポリシーやキャリアパスの提示により、本学の大学院像を社会に明示していく。

社会連携

豊富な知的資源を社会に還元するという理念の下に、広く社会全般との知的連携を図る。多様なステークホルダーに対する社会的貢献を果たすことを通じて本学の存在感をいっそう高めていく。

国や地方自治体の審議会などに積極的に寄与し、産業界との適切な関係を維持・発展させるとともに、外国政府や国際機関への助言活動を推進する。大学や学部主催の市民講座を充実させるとともに、学生が主体的に地域と関われるよう積極的に支援する。

四大学連合、多摩五大学、津田塾大学との大学間連携については、これらをより機能化・実質化するための方策を講ずる。

社会との連携については市民や産業との関わり方についての十分な検討を踏まえて、積極的に進めていく。

国際交流

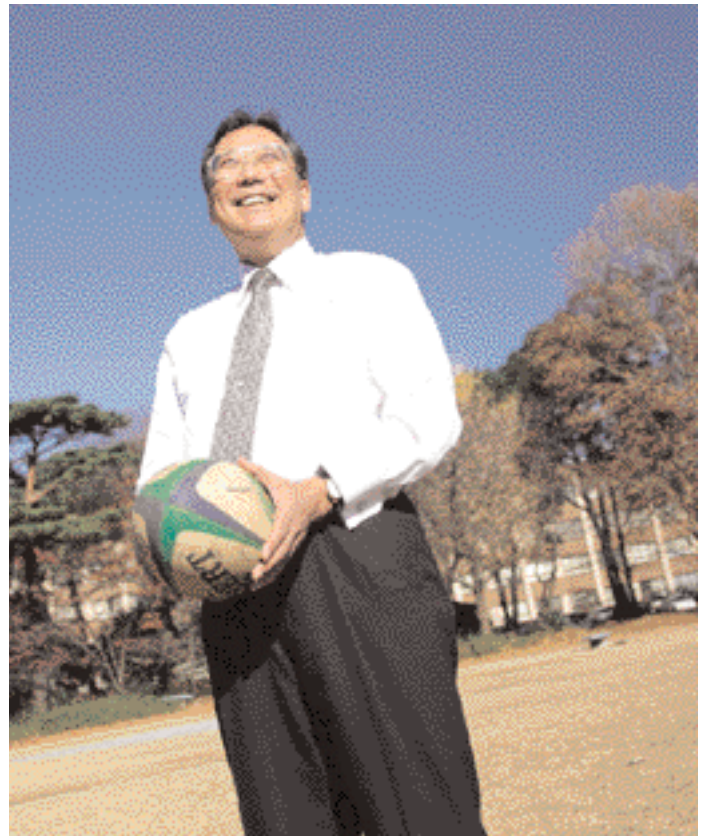
海外の研究教育機関とは、地域別、領域別、課題別に、国際交流における重点を明確化し、学术交流や学生交流の推進における基本原則を確立することに努める。交流活動の推進のコアとして、研究者の招聘および派遣を活発に実施するための体制づくりを進め、有効な支援の体制を構築する。

学生の国際交流については、全般的に推進するとともに、交換留学生の受け入れをさらに強化する。派遣留学については、海外の交流協定締結校との連携をいっそう緊密なものとし、単位互換や読み替え、複数学位の取得などの制度の整備を進める。

評価への対応と次期中期計画

認証評価と法人評価に的確に対処するために、年次計画を着実にこなし改善のサイクルの運用に努める。計画の実施にあたっては、すべての大学構成員が主体的に参画することを目指したい。その重要な要素として、情報収集システムを構築し、研究教育活動に対する評価制度を整備して、優れた成果をあげた者への優遇措置の導入も検討する。

次期中期目標・中期計画については、現行の中期目標・中期計画に対する自己評価と点検を踏まえて、めりはりの利いた内容のものをつくり上げる。



杉山学長は学生時代、体育会ラグビー部のスクラムハーフとして活躍した

広報および情報化

先端的研究教育と自己点検評価に不可欠な学内の情報インフラと情報システムの整備を、包括的なグランドデザインに基づいて迅速に実施し、情報の収集・整理・発信能力を強化する。一方、広報を充実させることにより、大学の多面的な活動状況や諸成果、種々の評価結果などを社会に広く伝達し、大学の知名度と対外的イメージを飛躍的に高めることを目指す。同時に、大学の一体化と活性化を図る。

組織運営

学長と大学構成員との対話を促進し、意思疎通を図るとともに、学内における情報の流れを円滑化して、組織運営の透明性を確保する。

また、大学運営における教員と職員の一體的参画を推進し、併せて、人事戦略として大学採用職員の幹部職への採用を推進する。また、必要に応じて外部の人材も活用して、本学の企画立案の体制および能力の強化を図る。

財務と施設

大学運営における今後のさらなる可能性を拡大させるため、財政基盤の拡大と充実を目指す。外部資金の獲得を期待するとともに、効率的かつ効果的な研究教育活動の下、経費の節減を追求する。また、如水会との密接な連携の下に、一橋大学基金を充実させるための体制を整備し、募金戦略を策定して実行に移したい。

学内施設増強については、長期的な施設維持管理計画を策定し、優れた研究教育環境をもったキャンパスの維持と一層の発展を図る。

大学から君の将来は始まる



教育・学生担当副学長

坂内徳明

Tokuaki Bannai

あえて言いたい

「先輩の話を疑ってみる」

熾烈な受験競争を乗り越え、おそらく希望の本学に入学された皆さん、おめでとう！

まずは、大学生活最初の豊かで充実したプログラムに驚きながらも、十二分にそれをエンジョイして下さい。しかし、あえて新入学生の方々に最初におきたいのは、「先輩たちの言葉を鵜呑みにするな」ということです。

かつて一橋大学で学び、社会に出てこれまで多くの実績を残してこられた卒業生たちは、とかく古き良き時代のいいところだけを強調する傾向があります。社会的地位のある先輩諸兄姉が、公式・非公式の場で「オレ／ワタシは大学時代にまったく勉強しなかった」という発言をするのはごくあたりまえのことです。ただし、それはかつての楽しい青春生活に対するノスタルジーからだけではありません。心底では、勉強したことへの自負を持ちながらも、他人には謙遜し、控えめに言う、あるいは、厳格な自己評価をして「大学ではまだまだだった」、「社会へ出たらやはり勉強不足を痛感した」、あげくの果ては「人生・仕事は一生勉強である」といった感慨を込めた言葉だったとしたら、皆さんはそれをどう理解すべきでしょうか。実力を持つ人々こそ、自身の力量を知る、無知を知るからこそ知ある人なのです。

あるいは、「大学時代は勉強しなかった」という言葉が日本人

の大学と社会をめぐるクリシェ（常套句）であり、「挨拶言葉」と化しているとすれば、その言葉の表層だけをそのまま単純・素直に受け取れるでしょうか。ゼミナール等で留学生と意見交換をしてみると、彼らの多くが、出身国での大学時代にはたしかにスポーツ等に情熱と時間を費やしました、と言いながらも、自分はそれ以上に多くの熱意を込めて勉強したことをあえてプレゼンテーションするのは常識です。そのことと比べると、本学の先輩方の言葉は何と日本人的なメンタリティから発するものか！と驚くのです。

先輩とはかなり以前に卒業した人々だけを意味しません。近年、大学から社会へ出て行った方々、あるいは現在在学するクラブやサークルの先輩も意味します。それは、少し意地悪な言い方になるかも知れませんが、特にここ数年の大学の大きな変化の中で、学生間に流布する情報は多くの誤解を生む可能性があるからです。正直言って、現在、気軽に単位が取れる科目はないと思ってください。卒業はなんとかなる風の考え方は教員サイドにはないからです。

自ら問題を設定し

自ら解答を導き出す能力と教養の獲得へ

大学時代は、自分の適性を見つめ、本当に関心の持てるものを探すための重要なトレーニング期間にあたっています。大学でも社会でも共通するのは、問題意識を持って自ら問題を設定し、その解答を自分で導き出すことができるかどうかということです。ペーパーによる入学試験問題のような、正解が必ずあるわけではありませぬし、効率重視の解法技術をただ模倣するわけにはいきません。ここでは個人々人が自分の中で納得のいく「オリジナルな解答」を自分の工夫と努力でもって創造していく

よりほかないのです。

元学長の故阿部謹也先生は、社会で生きていくための最も基本的な要素として「教養」を挙げておられましたが、それはそのまま私の言う「オリジナルな解答」に当てはまります。西欧中世において、一生の間ほとんど一度も村から出ることなく、外国語の文献はおろか母語の文字すら読めず、先祖代々の職業を何一つ疑うことなく受け継いで人生を過ごした人々が「教養」を持っていた、「オリジナルな解答」を手に入れていた、と言われてもピンと来ないかもしれません。

昔話という人間の表現作品はかつて世界中に広く存在し、今なお一部で伝承されていますが、現代社会の変化の中ではより魅力あるコンピュータ・ゲームやさまざまな小説・物語に取って替わられています。しかし、形や筋こそ違っても、昔話の多くは人間の社会の仕組み・コミュニティ成立の基本条件をもっとも根源的に示すものとして現代まで伝承されてきましたし、コミュニティが人間のものとして存続する限り継承されていくはずです。その中で主人公は、自分が慣れ親しんだ村からいつも「旅立」たねばなりません。数々の「試練」に直面し、自分一人ではなく（スーパーマンとしてではなく）必ずサポーターの協力を得ながら「難題解決」に挑み、「帰還」するのです。そして、戻った村で主人公は「別の人格」を備えた大人としてコミュニティに迎えられます。

新入生の皆さんは「大学」という旅の世界に入ったのです。そこでの問題（学問）への姿勢と切磋琢磨が四年間で身につける教養（人間力）となり、技芸（スキル）を手にするのです。

大学生になった皆さんはすでに大人としての自覚を持っているかもしれませんが、この四年間、あるいは大学院ならば二年ないし五年間が、どうかより大きな成長の時間となりますように、心からお祈りいたします。（談）



大学の 実力



《競争的資金の獲得状況》

一橋大学の教育研究のレベルの高さを示す 科学研究費補助金採択率第1位

国立大学法人化により、一橋大学も他の国公立大学、私立大学との激しい競争にさらされることになりました。さらなる教育研究の質的向上が必要なのはいうまでもありませんが、その原資となる資金の外部からの獲得競争も激化してきたのです。

なかでも大きなウエイトを占めているのが、科学研究費補助金、戦略的創造研究推進事業、科学技術振興調整費に代表される競争的資金です。社会科学の総合大学である一橋大学の場合は、科学研究費補助金を中心に、「21世紀COEプログラム」「国公立大学を通じた大学教育改革の支援」(大学教育改革等推進事業)などを獲得しています。

では、一橋大学の競争的資金の獲得状況はどうなっているのでしょうか。

科学研究費補助金

科学研究費補助金(詳しくは後述)では、一橋大学は独創的・先駆的な研究を発展させることを目標とした科学研究費の新規採択率において、61.3%(平成18年4月)と国公立全ての研究機関のなかで堂々の首位を走っています。これは、単年度のことではなく法人化以前からのことです。このことは研究の質の高さを如実に示しており、大いに誇れることといえます。

21世紀COEプログラム

21世紀COEプログラムは、第三者評価に基づく競争原理により、世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援し、国際的競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進することを目的としています。研究期間は5年間。91大学272拠点が採択されており、一橋大学からは次の4件が採択されて研究が継続されています。

- 「知識・企業・イノベーションのダイナミクス」(社会科学分野)
- 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」(社会科学分野)
- 「社会科学の統計分析拠点構築」(社会科学分野)
- 「ヨーロッパの革新的研究拠点」(革新的な学術分野)

国公立大学を通じた大学教育改革の支援

「大学教育改革等推進事業」では、一橋大学は平成16年度には3件、平成17年度には5件が採択されました。平成18年度にはさらに、3件の新規採択があり、過去最高の採択件数、金額となっています(下図参照)。

いずれも第三者による公正な審査の結果採択されたわけで、一橋大学は教育研究が充実した特色のある大学であることが社会的に認められている証といえるでしょう。

平成18年度文部科学省大学教育改革等推進事業採択一覧

事業名	プログラム	部局	実施年度
特色ある大学教育支援プログラム	人間環境キーステーションとまちづくり授業	教務課	平成16~19年度
	日欧交信型法学研究者養成プログラム	法学研究科	平成17~18年度
魅力ある大学院教育イニシアティブ	社会科学の先端的な研究者養成プログラム	社会学研究科	平成18~19年度
	法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム	科目横断的法学倫理教育の開発プロジェクト	法学研究科
法科大学院等専門職大学院教育推進プログラム	日本発のケースによる高度専門職業人の養成	国際企業戦略研究科	平成18~19年度
大学教育の国際化推進プログラム (長期海外留学支援)	本学の学生5名を 外国の大学院に留学させて学位取得を支援	留学生課	平成17~19年度 ※単年度毎申請
大学教育の国際化推進プログラム (海外先進教育実践支援)	日英文章力開発クラス設置と上級TAの養成	言語社会研究科	平成18年度
大学教育の国際化推進プログラム (海外先進研究実践支援)	日本法国際化のための共同研究の推進	法学研究科 経済研究所	平成18年度

「新時代の大学院」の社会的使命を果たす「社会科学の先端的研究者

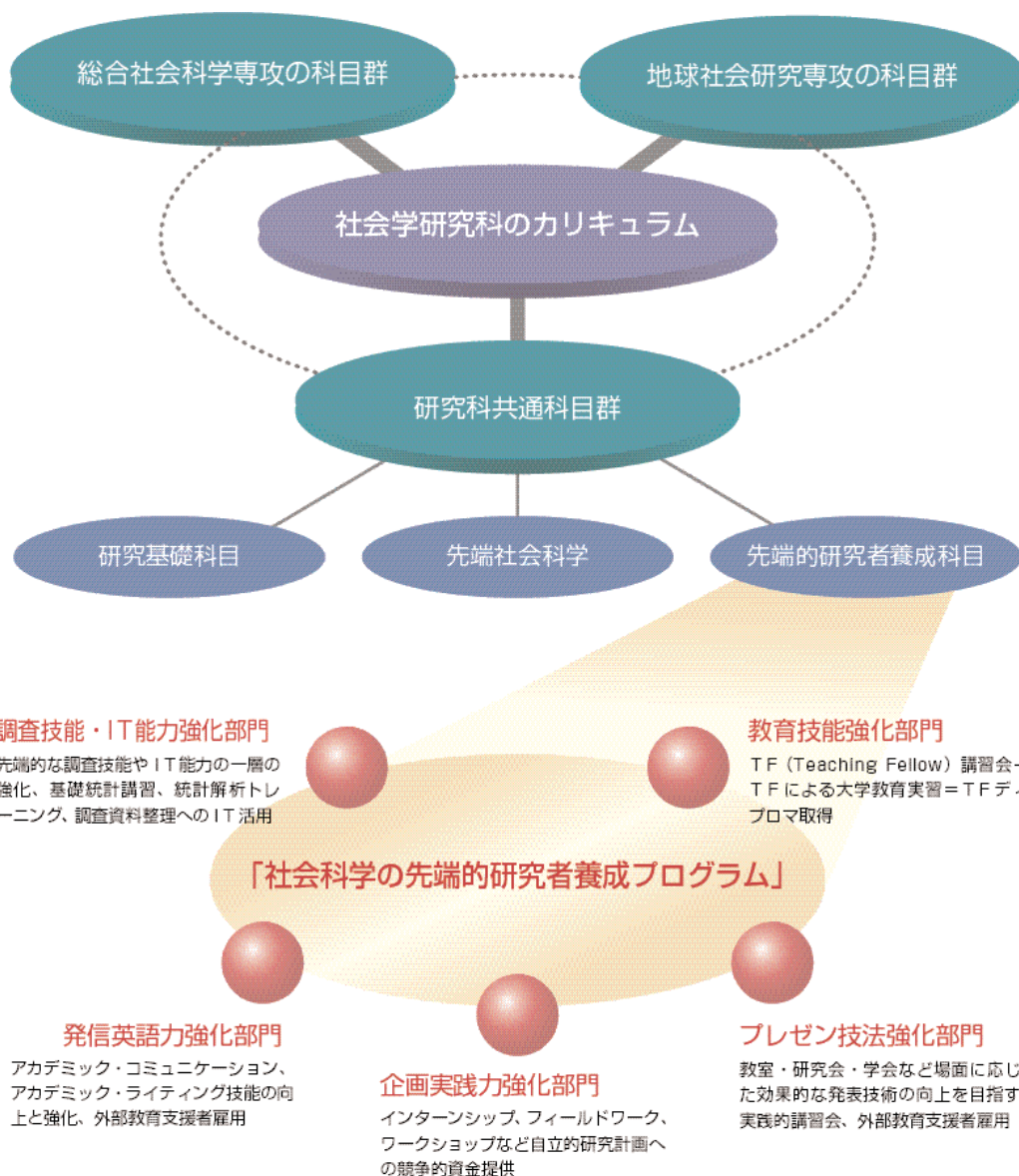


社会学研究科教授
落合一泰

基幹大学院として育成したい院生像

本学の大学院は、専門的な高度職業人を養成するとともに、国際的な展開力を備えた先端的研究者の養成を社会的使命としています。社会学研究科が平成18年度から取り組んでいる「社会科学の先端的研究者養成プログラム」は、高度な研究能力、実践力、教育力を備えた世界水準の次世代研究者の養成を目指しています。私たちは、このプログラムを、「新時代の大学院教育の実質化」（中教審答申）を推進するステップにしようと考えました。その実現のために、このプログラムをもって平成18-19年度文部科学省《「魅力ある大学院教育」イニシアティブ》に応募し、採択されたのです。

●社会学研究科カリキュラムにおける「社会科学の先端的研究者養成プログラム」の位置づけ



社会学研究科は、総合社会科学専攻と地球社会研究専攻の2つの専攻で構成されています。私たちは、社会学研究科ならではのトレーニングやスキル獲得が両専攻に共通の課題であると捉えました。そこで、将来の研究者・専門的な職業人に必要な高度な研究技能や応用力、教育力などをたっぷり身につけてもらおうと本プログラムを計画したわけです。

本研究科で十分なトレーニングを経た大学院生像は、次の通りです。

- 〔1〕 独創的な構想を企画と実践に結びつけることができる。
- 〔2〕 先端的調査技法を修得し、語学力を含めた高度なコミュニケーション力を備えている。
- 〔3〕 専門的な問題意識を分野横断的に展開できる。
- 〔4〕 社会科学の本質と魅力を伝える教育力を持つ。
- 〔5〕 博士号を標準修業年限内に取得する。

先端的研究者を育成する5つの柱

このプランに沿って、つぎの5つの部門からなる本プログラムを設計し、実施に移しています。「調査技能・IT能力強化部門」「発信英語力強化部門」「企画実践力強化部門」「プレゼン技法強化部門」そして「教育技能強化部門」です（左頁図参照）。いま、これら5部門は、平成19年度カリキュラム改革で新設された「研究科共通科目群」の一角を占めています（左頁のモデル参照）。新たなカリキュラムをこなし、高度な研究技能や企画能力、教育力や展開力を身につけた院生ならば、産官民学のあいだで職業的流動化がいつそう進むと予想される21世紀社会を生き抜き、大きな社会貢献ができる私たちを期待しています。

このプログラムの目玉の一つが、「教育技能強化部門」です。これまで、博士後期課程の院生の最優先課題は博士論文の作成でした。院生は、レフェリー付きの雑誌に多数の論文を投稿するよう指導されてもいます。しかし、大学教員の職を目指す院生であるのに、大学教育の理論・方法論を学び実習する機会を提供されてきませんでした。論文執筆が重要であることは言を待ちませんが、院生がTA（ティーチング・アシスタント）として教育経験を積むアメリカとは、教育力形成の点で大きく差がつかます。しかし、「大学院教育の実質化」を文部科学省がかかげ、教育に熱意ある大学教員の養成が重視されるようになった今日、大学教育に関する知識を身につけ教育技

能を強化しておくことは、就職活動においても重要度を増すことでしょう。その知識や経験があれば、就職が叶ったときも、落ち着いて教育に励むことができます。そこで、講習会と授業実習の2段階からなる「TF（ティーチング・フェロー）トレーニング・コース」を設けました。コース修了者には「TFディプロマ」を授与し、各自の教育ポートフォリオ*の充実に役立ててもらいます。昨年度は、大学教育方法論が専門の講師をアメリカから招聘しました。

受講生の意見で進化するプログラム

本プログラムは平成18年10月に産声を上げました。説明会を開催したところ、実に110名もの院生の参加がありました。院生の知的欲求と実践への期待は、想像以上に大きかったのです。

初年度の平成18年度は、冬学期のみの実施でしたが、各部門で質の高い講義やコースが開かれ、多数の院生が受講しました。発信英語力強化コース修了者は24名に達しました。院生自身の企画運営で国際ワークショップが3件実施されましたし、国内フィールドワークに8名送り出すこともできました。TFトレーニング・コースに40名も参加したのには驚きました。本プログラムが院生の潜在的なニーズをさまざまな形で掘り起こしていると実感しています。

今年度は、アカデミック・ライティング、社会科学における映像情報処理、学術情報発信拠点としてのウェブサイト管理などの講義も新たに展開していきます。

本プログラムでは、博士後期課程の院生がRA（リサーチ・アシスタント）として大勢活躍しています。その声を生かしながら運営できることも大きなメリットです。本プログラムをさらに活性化するために、受講生がプレゼンテーションの練習や意見交換をするセカンドライフという3Dオンライン仮想空間**を構築することも計画中です。

詳しくは本プログラムのウェブサイト

<http://miryoku.soc.hit-u.ac.jp/> をご覧ください。***（談）

* 自分の教育経験に関する資料や評価をまとめたファイルで、教育力の判定と改善のための基礎資料になる。

** <http://secondlife.com> を参照。本プログラムでは、担当教員がコンピューター上に作り管理する。

*** 本プログラムの対象は、社会学研究科所属院生のみ。

日本発の本格的なケースで、一橋大学ICSの存在感を世界に示す

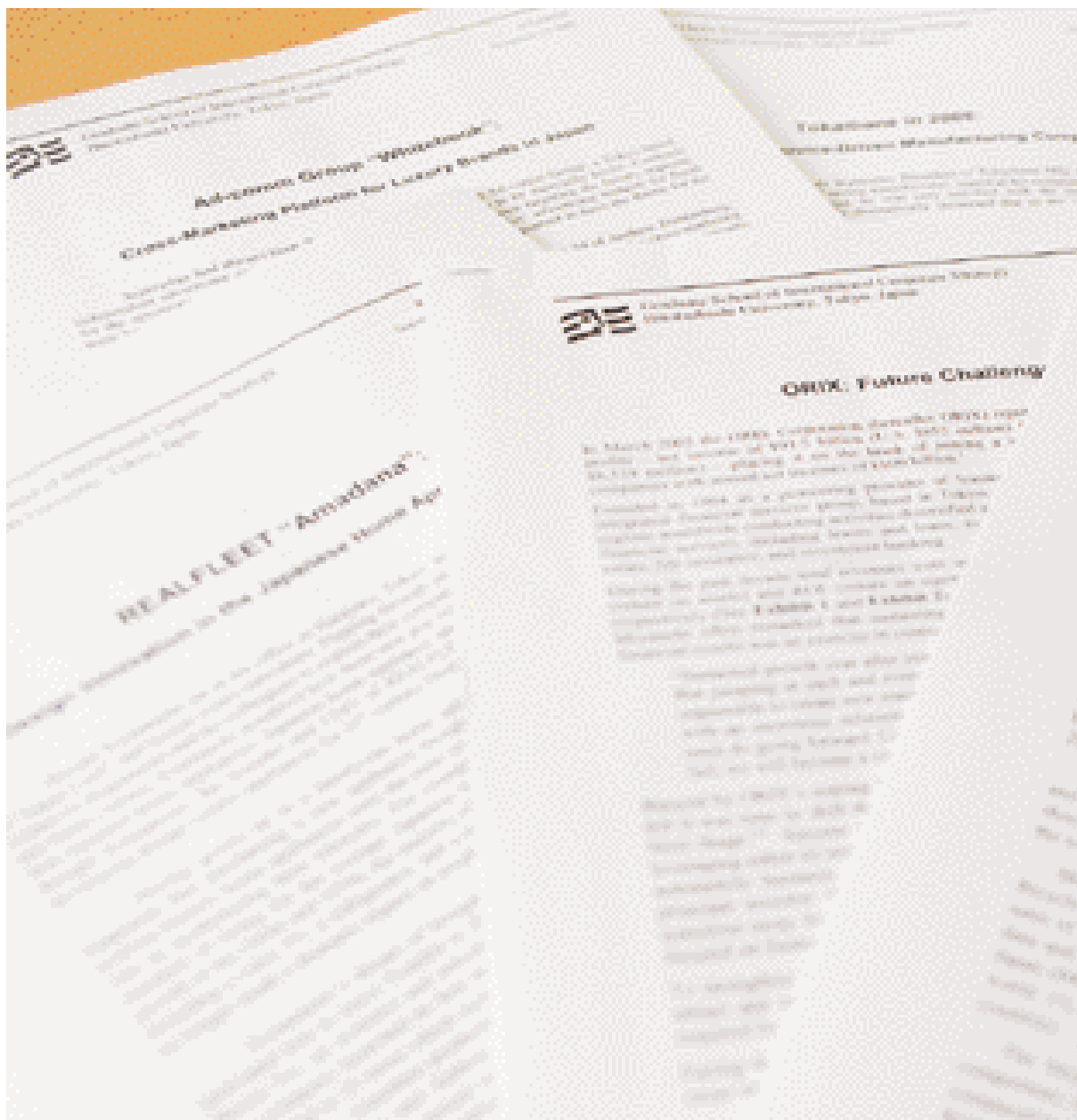


「日本発のケースによる
高度専門職業人の養成」研究代表
大学院国際企業戦略研究科研究科長
竹内弘高

アームチェア・ケースとは違う
本物のケースづくり

日本のMBAでは、使用するビジネスケースのほとんどを海外から購入しています。日本企業のケースについても同様です。ハーバード・ビジネススクールでは扱っている生産管理のケースの約50%は日本企業のものが占めています。もっとも最近では、日本企業のケースは激減し、中国企業のケースが増えています。それだけ中国が注目されているということです。

一橋大学ICSでは、2001年にポーター賞を設置。世界に冠たるユニークな戦略やイノベーションを行っている18社の日本企業・事業部を表彰してきました。ハーバード・ビジネススクールが日本企業に注目しないのであれば、我々が取り上げてやろうという心意気



です。こうしてケースづくりのベースができました。

ひとくちにケースといいますが、そこにはアームチェア・ケースもあれば本物のケースもあります。前者は座ったまま楽に入手できる情報によるものです。我々が作成するケースは、実際に企業の当事者にインタビューするもので、手間ヒマをかけたものです。日本企業に関してはビカイチのケースをつくる自信があります。

2年間で10件もの ティーチングノートを制作

このプロジェクトの前身は、2003年にスタートしたプログラムです。2年間で10ケースとティーチングノートを作成する構想でスタートして、予想を上回る大きな実績を残しています。それが、今回のプロジェクトにつながったわけです。

作成したケースは、ケースのクリアリングハウスを持っているヨーロッパにあるE C C Hやハーバード・ビジネススクールなどで登録し、世界中のビジネススクールに配布してもらいます。現在交渉中ですが、これらのケースは一橋大学I C Sのブランドで、世界に配信する予定です。

世界を意識して、当然ながらケースは英語で制作しています。ところが、ハーバード・ビジネススクールの日本拠点からは、日本語で書かれたケースが欲しいと依頼されました。日本での企業研修の際に必要なということです。日本語への翻訳でも協力していきます。

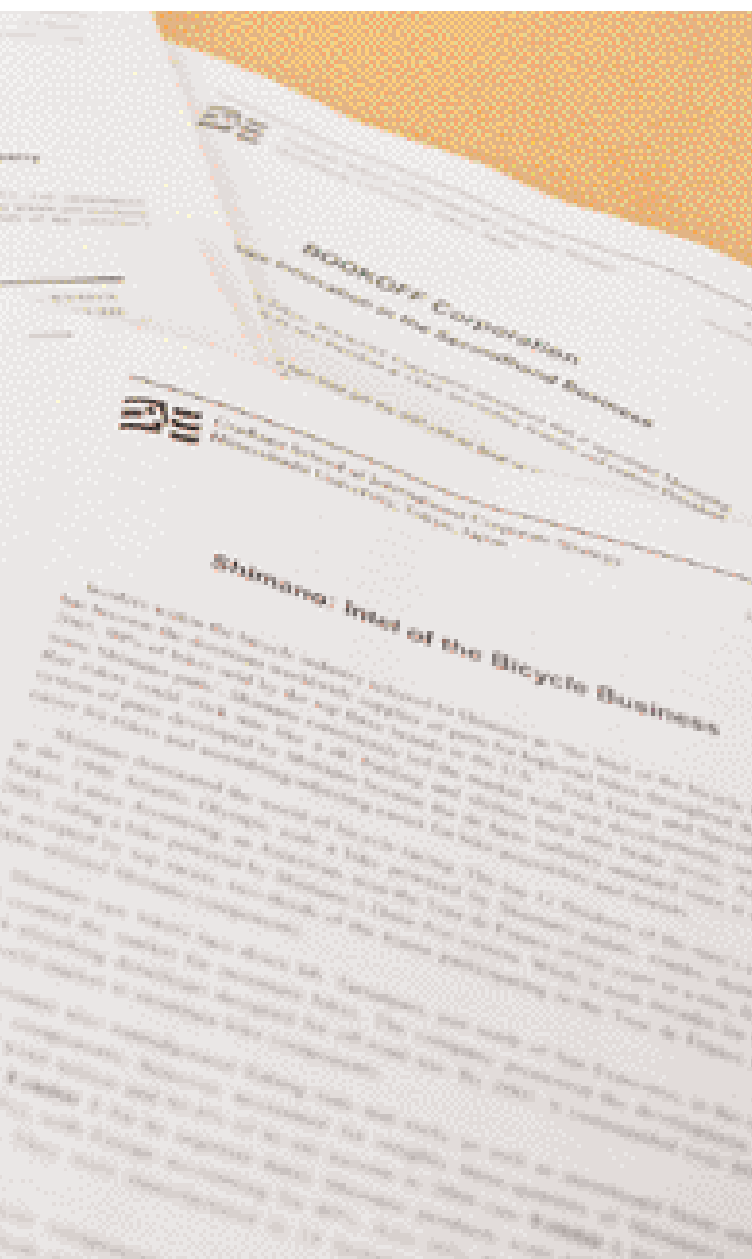
現在のプロジェクトは、その第二期目。やはり2年間で10ケース程度を作成する計画を立てて取り組んでいるところです。もし第三期にいければ、いよいよ一橋大学にクリアリングハウスをつくりたいと考えています。オリジナルケースが50ケースを超えるようになれば、日本企業に関するケースセンターになります。名実共に日本発、一橋大学発のケースとして世界に発信していきたいですね。そうなれば、一橋大学の名前が世界中に広がるでしょう。

第二の野中郁次郎を育てる 有効なツール

ケースづくりは、マネジメント分野ではとりわけ有効な素晴らしいリサーチ手法です。日本はまだMBAの歴史が浅いですが、ようやく企業や業界との知的コラボレーションができてきました。例えば、トヨタ自動車。外国の研究者にはわかりづらい知的マネジメントの手法がしっかり見えてきて、ケースを通じてトヨタの強さを発表できるようになりました。また、トヨタをはじめ企業がケースをリリースすることが増えてきました。日本企業が自信を回復してきた証といえるでしょう。

ケースは事実の羅列であり、それをもとに学生が分析する素材です。ケースをもとに議論し反省し学びを深めていくプロセスのなかから、マネジメントとはなんぞやということが見えてきます。乗馬に例えれば、馬（学生）に跳ぶ意思がなければ騎手（教員）がどうあがいても障害をクリアできません。だからこそ、ケースには作成側の主観や分析が入ってはいけません。

なお、ケースづくりを通じてフィールドリサーチを行うことは、研究者にとっては第二の野中郁次郎になるパスでもあります。（談）





大学の 実力

科学研究費獲得に見る

1人1プロジェクトの気概で、
国際レベルの最先端研究を推進

国立大学の法人化により、各大学の総合力が問われるようになってきました。例えば、教育・研究資金でも、独立した1個の人格として外部資金を積極的に獲得しなければならなくなってきたのです。いわゆる「競争的研究資金」を獲得することは、各大学のアカデミックなレベルの高さが問われることでもあります。この面で、一橋大学は今、次のような状況にあります。

まず、教育・研究における外部資金の中心となる科学研究費補助金について見てみましょう。科学研究費補助金は、文部科学省と日本学術振興会とが分担して、審査・交付業務を行っているのが特徴です。

日本学術振興会が交付を行っている科学研究費補助金は、「科学研



一橋大学の研究力

究費」「研究成果公開促進費」「特別研究員奨励費」「学術創成研究費」の4つに分けられます。科学研究費は、さらに独創的・先駆的な研究を対象にした基盤研究のほか、若手研究（スタートアップ）、奨励研究に分けられています。一橋大学が「日本経済の物価変動ダイナミクスの解明：ミクロとマクロの統合アプローチ」で獲得した「学術創成研究費」は、特に重要な研究課題を選定し、創造性豊かな学術研究の推進を図るのが目的です。

一方の文部科学省が交付を行っている科学研究費補助金には、「科学研究費」として、特別推進研究、特定領域研究、萌芽研究、若手研究、特別研究促進費があり、「研究成果公開促進費」として研究成果公开发表があります。そして、「特定奨励費」として学術的・社会的要請の強い特色ある研究事業を助成しています。ちなみに、「世代間問題の経済分析」は、特別推進研究を獲得しています。

一橋大学が平成18年度に獲得した科学研究費補助金は、特別推進研究1件、学術創成研究費1件、基盤研究（S・A・B・C）90件、

萌芽研究3件、若手研究（A・B）23件、特別研究促進費（基盤A相当）1件、の119件にのぼります。ここ数年の科学研究費補助金の新規採択率の全国平均は24%前後です。平成18年度における一橋大学の特徴は、61.3%（平成18年4月）と新規採択率が格段と高いこと。また、社会科学分野のテーマでありながら、「特別推進研究」や「学術創成研究費」などの自然科学系が強い分野で、かなり高額の補助金を獲得していることが挙げられます。

「経済関係の研究なら一橋大学の経済研究所を見てくれという腹づもりで研究している」（高山憲之先生）

「研究者は1人1プロジェクト、1人1研究センターを立ち上げれば、一橋大学の顔が見えるようになる」（渡辺努先生）

こうした研究者の意欲と能力が、一橋大学の研究レベルの高さを支えており、社会的に高い評価を得ているといえます。このハイレベルな研究力が学部レベルの教育力にも波及することで、一橋大学の総合力向上につながっているのです。

《特別推進研究》



「世代間問題」は、もはや一橋大学抜きには語れない

「世代間問題の経済分析」研究代表
一橋大学経済研究所長

高山憲之

一橋大学経済研究所では学部で直接、学生を教育していません。しかし、研究を通じて2つの側面から学部を含めた大学に寄与しています。1つはいうまでもなくアカデミックな側面において、研究開発の成果を直接、あるいは間接的にフィードバックすることです。

そしてもう1つは、資金面です。国立大学法人化に伴って、運営費交付金は徐々に減らされています。科学研究費や特別教育研究経費、あるいは21世紀COEなど、いわゆる競争的資金の獲得競争に打ち勝たなければなりません。

そこで、経済研究所では「世代間問題の経済分析」をはじめとする特別推進研究や学術創成研究費など、大型プロジェクトに力を入れています。こうした補助金には、直接経費のほか間接経費が支給されます。平成18年度の科学研究費補助金を取得したプロジェクトは一橋大学全体で122件、そのうち経済研究所は22件と件数では一橋大学全体の18%ですが、大学の運営に資する間接経費獲得額では一橋大学全体の69%を占めていました。

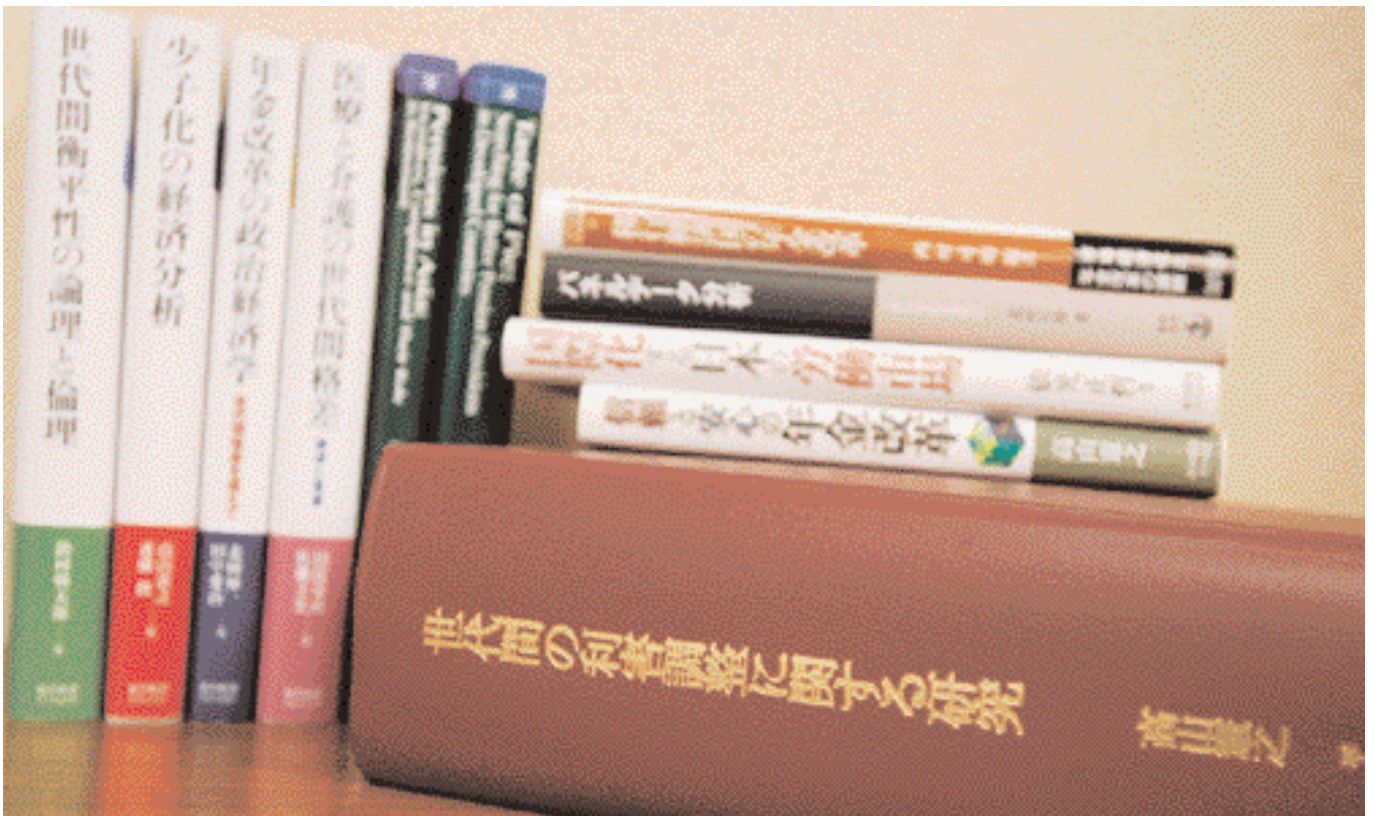
私が研究代表を務めている「世代間問題の経済分析」は、2000～2004年度の研究成果が「A+」という高い評価を受けた特定領域研究「世代間利害調整」の継続プロジェクトです。新しい時代の到来

を見越して、従来にはない構想で研究を進めてきたことが特別に高い評価につながりました。一橋大学には、こうした研究を支えるだけの知的アセットが蓄積されており、このプロジェクトが一橋大学における1つの大きな柱になることを確信しています。

では、なぜ「世代間」なのでしょう。例えば年金は、若年層と高齢層との世代間再分配が基本になっています。医療費も同様ですし、雇用を巡る世代間問題も顕在化しています。単に「少子高齢化」をテーマとするのではなく、「世代間」という切り口で整理したことによって、問題がより鮮明になったといえるでしょう。

研究は、日本の現状を念頭において進めていき、具体的な解答を提示できるようにしなければなりません。もちろん、その成果は世界各国でも普遍的な意味を持つことになるでしょう。

「世代間問題」は今や一橋大学抜きには研究推進できない課題であり、一橋大学こそ、その研究のハブ機能を果たすべき存在だと自負しています。なかでも平成19年度に新設予定の世代間問題研究機構は、世代間問題を専門に研究するシンクタンクとして、成果を出し続ける機関でありたいと考えています。(談)





誤りのない金融政策を行う起爆剤となるプロジェクト

「日本経済の物価変動ダイナミクスの解明：マイクロとマクロの統合アプローチ」研究代表者
経済研究所教授

渡辺 努

「学術創成研究費」は、特定のトピックの深耕研究を支援する補助金で、平成18年度は21件が獲得しました。そのうち人文・社会科学系のテーマはこのプロジェクトだけです。それだけ人文・社会科学分野で「学術創成」研究を行うのはまれであり、一橋大学がこの分野で助成を受けている意味の大きさがよくわかります。ちなみに、プロジェクトの組み立てマネジメントなどは、自然科学の研究者と同じ土俵に立っています。

これまでの「物価」研究は、総務省の消費者物価指数などのデータを活用して分析していました。一方、このプロジェクトでは、個々の物価を収集して分析しようとしています。つまり、物価変動というマクロ現象をマイクロの視点で分析しようとしているのです。

物価の変動は、金利の変動や年金支給額の物価スライドなど、世の中にさまざまな影響を与えています。政策形成に大きな影響を与えるにもかかわらず、現実には物価がうまく測れているかという微妙です。どうしても、データの方が後追いになってしまうからです。

私はかつて日本銀行で金融政策の運営にかかわっていました。その際に生じたバブル形成の原因の一端が、金融政策の誤りにあった

といわれています。その原因は、消費者物価が安定的に推移していて、物価の面からはインフレの懸念が見えなかったからです。逆にバブル崩壊時には資産価格の下落にもかかわらず物価は安定的に推移していました。つまり、物価が動きづらくなっているという事実に対する注意が不足していたのです。この資産バブル局面で物価が上昇しないという傾向は、実は世界各国で起こっています。物価変動のダイナミクスに変化が生じていると推測されるゆえんです。

この物価変動のダイナミクスの変貌と、企業の価格設定などミクロな変化との相互依存関係を解明するのが目的です。具体的には、企業の価格設定行動にマイクロレベルでどんな変化が生じているかをPOSデータなどの高頻度データを活用して、個別品目レベルで明らかにします。さらに、そのマイクロレベルでの変化が、フィリップス曲線などのマクロ変数間の関係にどんな影響を及ぼしているかを解明します。

一橋大学内に立ち上げた物価研究センターを拠点として、30億件の商品価格データを解析することにより、先駆的な研究成果を世界に発信していきます。また、このデータが、政府や日銀が正確な物価情報で政策を立案する起爆剤になると考えています。(談)



連載企画

世界を解く

第七回テーマ

「壊す」

学ぶ、働く、遊ぶ、食す…。

人間は日々、さまざまな行為を営んでいます。どれも一見、ごく当たり前のこと。

国境も地域も、民族も歴史も、時間も空間も超えて、

普遍的に存在しているこれらの行為は、その普遍性ゆえに見過ごされてしまいがちです。

しかし、例えば「学ぶ」という行為の本質を深く掘り下げ、

さまざまな角度から「学ぶこと」の意味を問うたとき、

そこには驚くほど豊かな世界が現れてきます。

学ぶことの社会的意味とは、その歴史的経緯が伝える価値観の変遷とは、

学びの経済効果と社会システムとの関係とは、等々。

ごく当たり前の行為は、その相貌を一転させ、生きるという営為の本質に迫る、

あるいは社会と人間のあり方の原点を理解する、貴重な手がかりとなるのです。

本特集企画は、こうしたキーワードにスポットをあて、そこから浮かびでる多様で豊かな世界を、

それが示唆する多くの問題点をありのままに考えていきます。

第7回目のテーマは、「壊す」。

異なる専門領域、視点をもつ研究者たちに、

それぞれの立場から「壊す」ということにかかわる今日的諸問題を語っていただきました。

e s s a y 「繭を編む」

言語社会研究科教授 ● 糟谷啓介

壊すことは作ることより簡単に見えるかもしれない。しかしそうではない。「破壊することは創造することと同じように難しい」のである。そういえば、「××をぶっこわす」と叫んで威勢よく登場しながら、まったく別のものを見事に壊して意気揚々と舞台を降りていった三文役者がいた。その勘違いのなはだしさを見ても、破壊の難しさがわかろうというものだ。破壊には威勢のいい文句は必要ない。「破壊なくして創造なし」などという、とって付けたような正当化さえ無用である。後から来る創造のためになされる破壊などは、真の破壊の名に値しない。ベンヤミンが言うように、「破壊したあとに何があらわれるかなど、破壊的性格にとってはどうでもいいこと」なのである。

その点、何といっても、かつて映画で見た怪獣たちは立派であった。怪獣は人間の作った町並みや道路など無視して、進みたいように進む。たしかに、ゴジラが身体を斜めにして、道路沿いにそそくさと小走りに歩みを進める姿はさまにならない。やはり怪獣たるものは、人間的な事物の虚妄性を思い切りぶち壊してくれなければ困る。彼らこそ、ベンヤミンのいう「破壊的性格」のモットー「場所を空ける！」を地で行く存在なのである。

しかし今の私の好みからすると、ゴジラの破壊には少々悲壮感がありすぎる。核実験による突然変異で巨大化したという出自も、そんな印象に影響しているかもしれない。それとは異なる、もっと笑いのこみ上げるような、夢のような破壊はないものだろうか。そう、たとえば、蛾のお化けが東京タワーを糸でぐるぐる巻きにして繭を作るなどというのはどうだろう。たしかに、これはかなり超現実的な光景である。かつての塔は真っ二つに折れ、いまや繭の芯になった。新たに到来した者が、古いものを別の目的のために勝手に作り変えてしまったのだ。破壊が物事の間を一変させることだとするならば、これほど見事にやりとげられたためしはない。そこに光ったかと思うと外皮は破れ、そこになったモスラが極彩色の翼を羽ばたき、明けの空を飛び去っていく。私たちが物事を壊すときにも、このように美しくありたいものである。そのためにも、私たちが自分たちの夢の繭をせっせと編むことにしよう。



国家の崩壊と再生

～旧ソ連諸国の体制転換と現代経済学～

移行経済論

1991年12月25日

季節外れの書き出しで恐縮ですが、クリスマスは、年の瀬の慌ただしさに追われながらも、心穏やかに過ごすことができる楽しい一日です。それは、イデオロギー的には神の存在を否定していた国、従ってキリストの降臨を祝う理由のないソ連の市民にとっても同じことでした。ですが、1991年のクリスマスは例外でした。改革者ミハイル・ゴルバチョフが大統領を辞任し、社会主義ブロックの雄として国際社会に威勢をふるっていた超大国ソ連の命運がついに尽きたのです。事実、同国の最高意思決定機関である連邦最高会議が、連邦の消滅を正式に宣言したのは翌26日のことでした。

当時の私は、在モスクワ日本大使館の書記官としてこの歴史的な大事件を目の当たりにしました。連邦共和国の相次ぐ主権宣言、共産党保守派による8月クーデター、スラブ3カ国首脳による独立国家共同体(CIS)の結成など、強力な中央集権国家ソ連に一大転機が訪れていることは、日本を含めたどの国の外交官も確信していましたが、現地で情報収集と分析に携わるプロの外交官ですらこの年のクリスマスに迎える結末を正しく予測できた人は(私が知る限り)誰一人もいませんでした。ましてや一般民衆は、ベレストロイカ末期の余りにも苦しい生活環境の改善を求めて政府に大いなる変化を求めてはいましたが、自分の国がこれほどにも唐突に壊れてしまうことを決して望んでいなかったと思います。

市場経済に向かって

しかし、問題はむしろその先でした。70年余の年月を費やし、国民生活の隅々にまで行き渡った計画体制を市場経済へ転換するという大目標の達成に向けて、旧ソ連諸国の政府と市民は、たいした海図も持たずに漕ぎ出さねばならなかったのです。しかも、中東欧の旧社会主義国とここが決定的に異なるのですが、ソ連という国家的枠組の中で、誤解を恐れずにいえば「ちょっと大きめな地方自治体」に過ぎなかったこれらの国々は、新生独立国として国造りもほぼ一から進めなければなりませんでした。その困難は想像を絶します。

旧ソ連諸国の体制転換をいかに導くのか? この問題は、西側諸国の間でも物議を醸しました。在モスクワ日本大使館でも連日激論が戦わされました。もちろん、主要各国の政府や外交団が、市民生活の大混乱を危惧しなかったわけではありません。しかし、議論の力点は明らかに別のところにありました。それは、ようやく終結した冷戦時代に逆戻りしないこと、つまり「ソ連邦の再生」を防ぐことです。ここから、次のようなロジックが生まれました。旧ソ連諸国を後戻りさせない→後退に抵抗する民衆を育てる→私的財産を保有する中間市民層を創り出す→改革を可能な限り急ピッチで進めさせる。そうして、改革志向的な政府、政治家、有識者に対する西側諸国の応援合戦が始まりました。日本政府も然りで、私自身もさまざまな支援政策に目まぐるしく関わりました。その片棒を大いに担いだわけです。

説得用具と化した経済学

ポスト冷戦時代の政治的潮流に、経済学も無縁ではありませんでした。否、それまで社会主義経済など一顧だにしなかったと思われる多くの経済学者が、声高に急進主義的移行戦略の正当性を論じ始めました。慌てて付け加えますが、幾名かの高名な新古典派経済学者を含めて、旧ソ連圏での拙速な市場経済化に懸念を抱く研究者は決して少なくはなかったのですが、結局、政治の必要は前者に味方しました。旧ソ連諸国の政策決定者を招いた色々な支援国会合の場でも、テキスト・レベルの経済学的知識が、いわゆる「ビッグバン型」改革処方箋として大いに唱導されました。驚くべきことに、この単純明快な説得は、多くの政治家や官僚に大変効果を発揮しました。また、恐らくは政治的な理由から、旧ソ連諸国側からもこの考え方に賛同する学者が相次いで現れました。新生ロシアで初めて首相の座に就いたイーゴリ・ガイダルは、その代表格といえるでしょう。

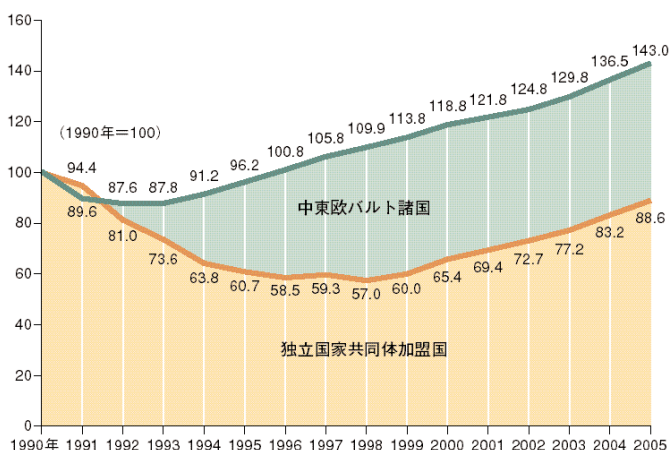




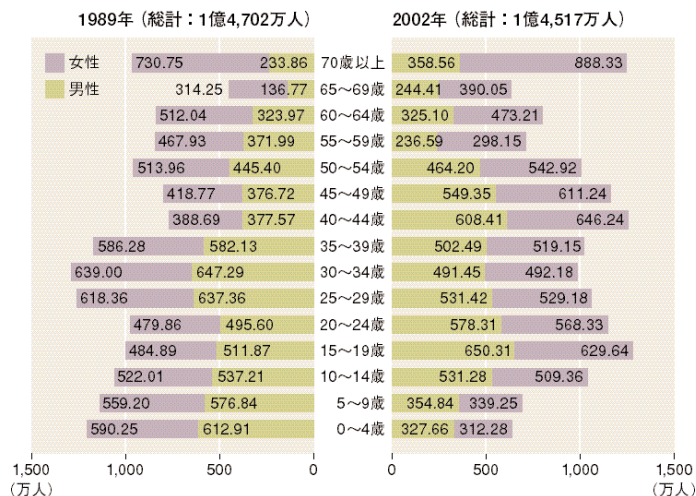
無責任な政策勧告の帰結

前述の説得工作は、西側政府が目論んだソ連再生の防止には確かに奏功したかもしれませんが。しかし、経済政策としては散々な結果をもたらしました。例えば図1の通り、C I S加盟国の生産活動は、連邦崩壊以後戦争にでも見舞われたかのように劇的に縮小し、1998年に底を打ってからは持続的回復に転じたものの、2005年時点でも1990年の水準を11%も下回っています。経済危機の深刻さは、中東欧地域と較べても顕著です。その大きな理由の一つは、先に述べた旧ソ連諸国な

●図1：中東欧・旧ソ連諸国の実質国内総生産（GDP）の推移



●図2：ロシアの人口ピラミッド（1989年／2002年）



らではの「二重の困難」を軽視した結果でした。

更に悲惨なのは、急進主義的改革に伴う経済的・社会的混乱が、人口動態にもたらしたショックの大きさです。我が国は、2005年に総人口がピークを迎え、いよいよ国家縮小時代に突入しましたが、ロシアでは既に1998年から急速な人口減少が観察されています。経済研究所の久保庭眞彰教授によれば、1990年代の人口損失は主に生産年齢人口の早死によるもので、例えば、1992～2000年の9年間になんと199万人もの男性が早死したと推計されています。その早死率は20%、つまり「死亡者の5名に1名は体制転換過程の犠牲者」だったのです。また、経済的困窮、将来に対する悲観、家庭内暴力やアルコール依存症の広がりなどを背景に、子供を産まない家庭がとて増えました。これらの結果、図2の通り、2002年に実施された国勢調査によれば、ロシアの人口ピラミッドは、1989年のそれと比して明らかにいびつなものとなってしまいました。いまでこそロシアは、BRICsの一角を占める振興経済大国として世界の注目を集め、国家の再生振りをアピールしていますが、西側諸国の無責任な政策勧告に従った「つけ」は、余りにも大きいのです。

反省と教訓

さきほど私は、「西側諸国の応援合戦の片棒を担いだ」と述べました。いま移行経済論を専攻する一研究者として、そのことを深く悔いているからです。残念ながら、旧ソ連諸国に対して経済学者が提示した処方箋の評価は、市場経済化や経済成長への効果に議論が止まっており、市民の暮らしや運命をどれほど脅かしたのかについては十分に検討されていません。恐らく誰もこの点に触れたくないのです。私の意見では、現代経済学は、旧ソ連諸国における体制転換プロセスの助けになったというよりも、むしろこれらの国々の苦難の経験から大いに学びました。紙幅の都合から詳しい紹介は適いませんが、その一端は、経済システムの仕組みを形作る制度や組織のあり方を重視する制度派経済学や組織経済学の今日の興隆に現れています。もし、市民生活の保全を第一に考えたならば失われなかったであろう、そしてこの世に生まれ出たであろう人々の命に思いを込めて、1990年代の反省と教訓を今後活かしていきたいものです。経済学は、世界を導く実用なツールなのですが、使い方を誤らないために細心の注意も必要とする学問領域だと確信する私は、このいささか天邪鬼なメッセージと共にこの短い文章を結びたいと思います。

メランコリーと破壊

ガラス屋の虐待

フランス七月王政期のあらゆる職業、あらゆるタイプの人物を絵と文で紹介した『フランス人自画像』（1840～1842年刊）には、当然ながらガラス屋の姿も描かれている。「あらゆる色合いのガラス」を背負子に載せて、独特の売り声を発しながら、割れものの商品がぶつからぬよう人込みを器用に縫って街中を巡回し、声が掛ければただちに窓の修理に取り掛かったものだという。

ガラスぐらい派手に壊れるものはない。閉店して道路沿いにぼつんと一軒廃墟になっている商店やレストランの窓ガラスが残らず割れているのを目にすることがある。悪童たちが人気のないときに石を投げて楽しんだのだろう。華々しく物を壊すことに快感が伴う証拠である。器物損壊罪に問われる心配がなければ、大人だってそうするかもしれない。

しかし、上記のようなガラス屋が背負っているガラスをすべて粉々に壊す人物がいたとしたら許しがたいことだろう。ところがボードレールの散文詩「益体もないガラス屋」にはそのような男が描かれているのだ。シュルレアリズムの詩人アンドレ・ブルトンはこの散文詩を『黒いユーモア選集』に収録し、これを、ボードレールが標榜したダンディズムの不可欠要素たる「黒いユーモア」要するにブラックユーモア抜いて、説明しようと試みた。それでよければ、これは19世紀の奇矯な詩人が書いたどぎつい冗談なのだを割り切って、楽しく読んでおしまいということになる。

ともかくその散文詩に語られている話とはこうだ。ある朝、話者「私」は寝覚めが悪く、何か大きなことをするよう駆り立てられる気分だった。通りで最初に目に入ったのはガラス屋だったので、7階の部屋まで上がってくるように言った。狭い階段を登ってくるのは辛いだろうし、割れやすい売り物があちこちにぶつかるだろうと考えてすでにうきうきしたという。ガラス屋が部屋に来ると、持っているガラスを全部調べて、ピンクや赤や青の色ガラス、「人生が美しく見えるガラス」がないと言いがかりをつけ（「あらゆる色合いのガラス」を用意していないのが不届きなのだという理屈か）、階段の方につきとばし追いついた。建物の戸口から出て来たところを狙い、背負子の上に植木鉢を落とすと、ガラス屋は転んで、背負ったガラスがすべて割ってしまった。「私」は自分の狂気に陶酔する。

話者は詩の末尾で、この異常な行為を「神経症的な冗談」と名付け

ているから、ブルトンの解釈は正しいかに見える。しかし冗談にしては面白くない。

メランコリー

そこでこの詩篇を、メランコリーという概念を通して読み解いてみよう。メランコリーへの言及はここにはまったくない。しかしメランコリーはロマン派の一大テーマだったことを忘れてはならない。ロマン派の後にやってきたボードレールは、「メランコリー」という言葉を詩の中に持ち込むのを躊躇わなくてはならないほど、ロマン主義の文学・芸術にはメランコリーがあふれていた。古代あるいは古典派の文学・芸術に対抗して登場し、現代的であることを自任したロマン派は、メランコリーは現代特有の現象であり、それはロマン主義の不可欠要素だと主張した。ロマン主義の薫陶を受けて成長し、これが衰退期を迎えた頃に創作活動を開始したボードレールにとって、メランコリーとの関わりは微妙な問題だった。当然のごとくメランコリーの作家シャトーブリアンに傾倒した彼は、この偉大な先駆者に生涯敬意を抱き続ける。しかし、1848年の二月革命に積極的に参加し、同年6月の労働者蜂起の折には叛徒側について銃をとるようになると、ボードレールはメランコリーを重視する立場に疑問を感じないわけにはいかなかった。たとえ美学上は承認できるにしても、それは政治的・社会的には疑わしいものと映るようになったのである。なぜなら、メランコリーは怠惰と孤独に通じ、行動を阻害するからである。とりわけ重大なのは、メランコリーに由来する孤独が、不幸な者たちとの連帯と相容れないことである。1851年には、典型的なメランコリー気質の人物ルネ（シャトーブリアンの小説の主人公）を、彼は否認するに至る。その後約10年間ボードレールは、メランコリーが連帯あるいは共感と両立するような論理を求めて思索を重ねたようだ。「益体もないガラス屋」の初出が1862年で、執筆時期もこれに近いと仮定するなら、それはボードレールがメランコリーに関して新たな境地に達した頃だ。

アリストテレスの「問題」

アリストテレスは『問題集』第三〇巻（一）で、卓越した人物はすべて黒胆汁が優勢な者たちだったのはなぜかと問っている。黒胆汁とは憂鬱の原因と考えられていた体液のことだ。この「問題」の解答の過程で



彼は、黒胆汁が過剰な体質の人、つまりメランコリー質の人の場合、黒胆汁が冷たいか熱いかで、行動が両極的になるという見解を示している。つまり黒胆汁が、多量で冷たいと無気力で鈍重になり、過剰で熱いと高揚し、有能になり、好色になり、激情と欲望に左右されやすくなって、人によっては多弁になるという。

「益体もないガラス屋」は、アリストテレスのこうした所見を実例の形で表現しているかに見える。というのは、ガラス屋の虐待の話の前に、散文詩には、物思いにふけるだけで行動に向かず、優柔不断で臆病なのに、衝動的に行動する者がいるという見解が示され、その種の人物が何人が紹介されているからである。みな話者の友人たちで、本来小心なのに、10回森に放火して失敗し11度目にはうまくいきすぎた人、暇つぶしに火薬の樽のそばで葉巻に火をつけてみる者、通りかかった老人の首に突然とびついて熱烈に抱きしめた人物といった具合である。アリストテレスの考えを当て嵌めるなら、彼らは、黒胆汁が過剰だが、普段はそれが冷たいので非行動的なのに、突然それが熱くなって衝動的な行為に走ったことになる。もちろん話者自身もその仲間というわけだ。結局この散文詩は、メランコリー質の人物の性格を、アリストテレスが理解した通りに描いているのである。

孤独から連帯へ

この新聞掲載とほぼ同じ時期にボードレールは、「寡婦たち」「ケーキ」「貧者の玩具」「貧者たちの目」「窓」といった恵まれぬ者たちへの共感を表明した散文詩を次々と発表している。ボードレールはそのような共感と連帯の根拠を、メランコリーのロマン主義的定義の中に発見したのかもしれない。ドイツ・ロマン派の作家A.W.シュレーゲルは、1809年から1811年にかけて行った『劇的芸術と劇文学について』の講義で、メランコリーは、古代人にはなかった現代人独特の感情であり、したがってそれは現代文学たるロマン派の詩の特質をなすと唱えた。キリスト教を信仰するようになった「人類」は、重大な過ちを犯したがゆえに、本来住むべき場所を喪失し、現世の目的はそれを取り戻すことなのに、自力ではそれが達成できないことを理解し、そこからメランコリーという感情が生まれたのだと彼は説明している（第一講義）。原罪のゆえに現代の人類は現世において流謫の境遇にあり、自助努力だけではそれから逃れることができないことにメランコリーの原因があるというのだ。この講義は、すでにフランス語訳が刊行されていたから、ボード

レールは、少なくとも間接的に、その内容を知る機会があったと思われる。大多数の詩人は黒胆汁過多だというアリストテレスの見解の通り、メランコリー気質だったボードレールは、A.W.シュレーゲルが宗教的な意味合いでメランコリーに導入した流謫の観念を政治・社会的なコンテキストに置きなおし、まさにそれは劣悪な生活を強いられた弱者たちの境遇に相当すると理解して、彼らとの連帯の感情に到達したのである。この境地を歌ったのが、「益体もないガラス屋」より幾分前の作と思われる韻文詩「白鳥」である。『悪の華』における「メランコリー」という名詞の唯一の用例が見られるこの詩篇には、余儀なく敵地ギリシアに暮らす、トロイアの勇将ヘクトールの寡婦アンドロマケー、檻から逃げてきたのにバリの舗石の上ではなすすべもない白鳥、流謫の詩人オウィディウス、肺を病みながらバりに住む黒人女性への共感が表明されている。「益体もないガラス屋」は、アリストテレスの古代的図式のままに、メランコリーを孤独・無為対衝動的行為という両極構造のもとに提示しているにすぎないのに対し、「白鳥」はロマン主義的な理解を超えたこれの新たな定義を包含しているのだ。「益体もないガラス屋」には、この現代的な定義の発見以前に詩人が準拠したメランコリーの古代的な定義が、いわば参照事項として示されているのである。

二月革命を契機に提唱された博愛主義や平等主義に含まれる偽善的で滑稽な要素を容認できなかったボードレールは、弱者への真の共感に到達するために、こうした面倒な手続きを経なくてはならなかったのだ。そもそも思索することは効率が悪いものである。



10年間にわたって徹底的に「壊した」ことが、GEの次の10年間の創造につながった

GEのウェルチ

GEのJack Welch（ジャック・ウェルチ）というと、偉大な経営者という評価が高い人物です。「No.1、No.2主義」「ワークアウト」「バウンダリレス」「6Σ」などのよく知られたイニシアティブや、「コーポレートユニバーシティ」でウェルチ自らが考え方や企業ミッションを社員に語りかける熱意を見ると、好き嫌いは別として、ある種の経営者のモデルとなっているといえるでしょう。

1981年にウェルチがCEOになって、GEはそれまでのGEとはかなり違う会社へと変わりました。前CEOのレグ・ジョーンズ時代は、いい意味でのビューロクラシーで、物事を分析的に行う洗練された会社でした。ところがウェルチに言わせると、「官僚的で決断が遅い」ということになります。

意思決定のスピードの速さや、結果重視の戦術的な仕事の仕方を共通価値観とするウェルチの姿勢は、確かに洗練された官僚制の権化だったGEを大きく変革したといえるでしょう。

企業改革でどんな施策をとるかは その成否に関係ない？

世の中のすべての経営者に、「企業改革が必要か？」と問えば、ほぼ100%から「イエス」の答えが返ってくるでしょう。では、どんな改革を目指すかという点、一様に「意思決定のスピードアップ」「集中と選択」「意識改革」「コーポレートアイデンティティの実施」「現場主義の徹底」といった答えが返ってきます。これは、ウェルチがGEで行ってきたこととほぼ同じことです。ということは、多くの企業の経営改革は、ウェルチ・モデルとほぼ同じことをまじめにやっ
ていながら、変革に失敗していることになります。それは、なぜでしょうか？

ウェルチがCEOを引き受けたときには、GEはあえて経営改革をする必要がないような高業績企業でした。それでも、長期的には変革の必要があるとウェルチは考えたのです。当時のGEは、「世界

最大のドメスティック企業」で、グローバル化の波に乗り切れていなかったからです。

GEはさほど切迫した状況ではなかったにもかかわらず変革に成功しました。世の中には、もっとせば詰まった企業が数多くありますが、変革できない企業が数多くあります。なぜでしょうか？

実は、そのキーワードこそ、「壊す」なのです。

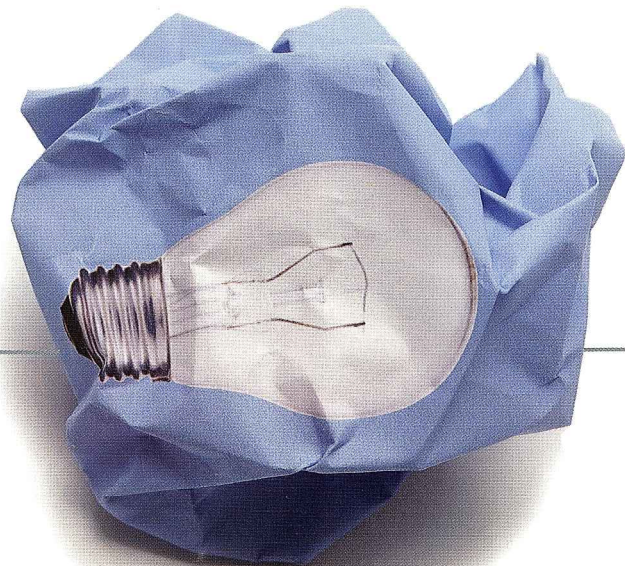
企業変革に最悪の時期に CEOに就任したウェルチ

1981年にウェルチがCEOに就任したときは、経営改革には最悪の時期でした。当時のGEは、

- 〔1〕 好業績（これが最大の敵）
- 〔2〕 企業規模（従業員約40万人、大規模企業ほど変わりづらい）
- 〔3〕 コングロマリット（事業の広がりが大きすぎると変革が難しい）と普通だったら改革を考える状況にありませんでした。しかも、ジョーンズ時代のGEは、きわめてシステムチックな経営が行われていました。戦略本部のスーパーエリートが分析的に経営資源の配分を行っていたのです。この仕組み自体を変えるには、かなりの努力が必要になります。

同じく経営改革に成功している日産と比較してみましょう。当時の日産の場合は、

- 〔1〕 業績最悪（いやでも経営の仕組みを変えざるを得ない）
 - 〔2〕 自動車メーカー（変革すべき分野の焦点が定まっている）
- と、カルロス・ゴーンが経営改革を行うにはわりと好条件が整っていたといえます。





では、これだけ悪い条件の中でウェルチは経営改革に成功できたのでしょうか。これまでの説明でおわかりのように、行った施策自体にはそれほど大きな意味がありません。ほとんどの企業が、同様のことを決定して実行しているわけですから……。

「ニュートロン・ジャック」というあだ名が意味するもの

ウェルチの経営を見ると、最初の10年間とあとの10年間とは、かなりトーンがちがいます。ここに本質があるというのが僕の意見です。

最初の10年間でのウェルチの評価は、「ニュートロン・ジャック」という悪名が示すように、偉大な経営者とはほど遠い悪役でした。好業績のGEを引き受けたにもかかわらず、中間管理職をどんどん切っていくって、40万人の従業員を29万人にまで減らしていきました。中性子爆弾のように、建物を残して人だけを切るといわけです。しかも、事業を整理して業界No.1、No.2の分野しか事業展開しません。これでは、勝つのが当然だという批判です。

確かに20年間を通じて業績は一貫して好調でしたが、果たして手放して素晴らしい経営といえるかという点、私には疑問があります。ただ、企業改革に成功したことには間違いありません。

その成功した理由は、最初の10年間は「ニュートロン・ジャック」に徹し、これまでの経営を徹底的に破壊したことです。

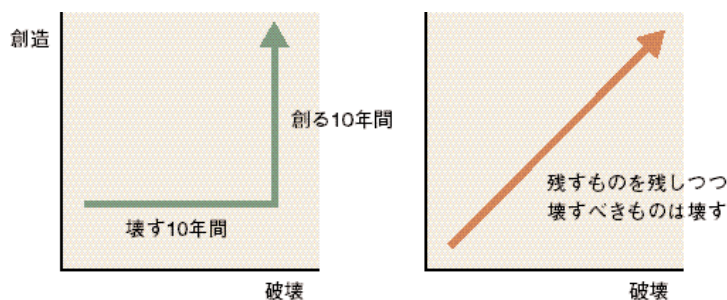
日産のようにせっぱ詰まった状況と違って、GEのように「素晴らしいもの」を数多く持っている企業は、それを壊すのが難しいものです。ウェルチがやったことは、ジョーンズ時代の「素晴らしいもの」を含めて、壊しすぎるくらい壊しました。

住宅建築にたとえると分かりやすいかもしれません。ジョーンズ御殿を生かしながらいフォームで理想の城をつくるには、抵抗が大きく時間がかかります。しかし、貴重な財産もあるかもしれないけれども、思い切ってジョーンズ御殿を取り壊してしまえば、理想のウェルチ城を建てるのにそうは時間がかかりません。ウェルチは、最初の10年間で思い切ってこれまでのGEを更地にして、創りたかった理想のGEを次の10年で建てたわけです。(図1)

多くの企業では、よい部分は継承し、修正すべきところだけ変革しようという発想で企業改革を行います。(図2)しかし、そんな高度なことは、個人ならいざ知らず、組織ではかなり困難なことです。それは、多くの企業が経営改革に失敗していることからよくわかります。

(図1) GEの経営改革のベクトル

(図2) 多くの企業の経営改革のベクトル



「壊す」のが難しいからこそ自ら壊す姿勢が重要になる

つまり、変革では、「いかに壊すか」がポイントになるのです。すでに競争によって他社に破壊されかけていた日産の場合は、経営のベクトルを創造に注力できますが、自ら壊すことほど大変なことはありません。それは、経営者に任期があることも一つの原因です。改革を志すと、任期は壊すだけで終わってしまいます。人情としては、壊す経営だけではつまらないというのはよく理解できます。ウェルチのようにできる経営者は、めったには現われません。

翻って一橋大学を見ると、研究、教育ではそれなりの評価を受けており、そこそこ優秀な学生が入学していますから、「壊す」という大学改革に躊躇するかもしれません。しかし、組織として考えると今こそ変革の時期といえます。自分たちの大学が人によって壊されるのでは情けないですから、少なくとも一橋大学の改革は主体的に自らレガシーを破壊するところから始まるべき。今以上に破壊に軸足を置いた動きをとる必要があるでしょう。(談)

「人間」を壊す

人類学

人類学者の怪しい願望

当たり前過ぎて誰も不思議には思わないようなことをあえて問題にして、突っ込みをいれておもしろがるのが人類学者にはある。たとえば「人間とは何か」という問などはそのいい例だ。これは確かにあまりにもありふれていて、まともに問うのは気が呵けるくらいだ。むしろ「経営とは何か」「政治とは何か」「歴史とは何か」「宗教とは何か」「存在とは何か」「物質とは何か」「宇宙とは何か」などというもっと専門的で難しそうな問のほうがためになりそう。さらに言えば、人類学者がわざわざ海外へ出かけ、「人間とは何か」と問うと言っても、実際には我々が日々の会話でよく口にすること、たとえば「お金」「仕事」「食べ物」「男と女」「セックス」「家族」「結婚」「離婚」「相続」「子育て」「子供」「住まい」「服装」「からだ」「病気」「崇り」「よそ者」「お祭り」「お祝い」「贈り物」「しきたり」などについてもっばら研究しているに過ぎない。それなのに、人類学者はそんな研究に基づいて、いきなり大真面目に「人間とは何か」という問を立ててしまう。それどころかその答えとして「人間」についてかなり意外で重大な問題をみつけたと大胆に主張したりするのだ。そこには「人間」を壊したいという、たぶん本人にもよくわからぬ怪しい願望のようなものがあると思えない。いったい何が問題だというのだろうか。

「人間」の終焉

確かに社会学者にも似たようなことに興味をもって研究しているひとはいる。しかし「人間」がやることに人類学者が興味を持つと言う際の「人間」には、日本のように「西欧」をかなり真似てきた歴史のあるところで成型された「人間」とはどこか違う「人間」も含まれている。そしてフィールドワークと称してそういうところに出かけて行って、そのことを習い、日常生活を長期にわたって共にしていく。やはりそういうやりかたで調査していくからこそ、われわれにとっては思いがけないような「人間」や「人間の在り方」にぶちあたる可能性だって高くなるのだ。こうして研究を続けていくと「人間とは何か」という問は実はかなりややこしい問であることに気づきだす。

まず、これまでの自分の「人間観」がいかに偏狭なものであったか痛感せざるをえなくなる。そして、そもそも「人間」という概念は果たして普遍的なものなのかどうか疑うようになってくる。もっともフランスの特異な思想家フーコーのように、西欧の人文科学を歴史的に綿密に検討した結果、「人間は決して昔からどこにでもいたわけではなく、西欧という地理的に限られたところで比較的最近になって発明され、今やそれも終焉に近い」と謎めいたことを言い残した人もいるので、「人間」の普遍性を疑うこと自体は、そんなに目新

しいことではないのかもしれない。それに、やはりフランスの人類学的思想家レヴィ＝ストロースも、『野生の思考』という本で、「人文科学の究極目的は人間を構成することではなく人間を溶解することである」などと、やはり謎めいたことを言っている。フーコーはさらに「人類学と精神分析学は人文科学が創ってきた人間を絶えず、その根拠を露にすることによって、壊し続けてきたと言う点で、むしろ反人文科学とみなすべきだ」とまで言って持ち上げている。これは要するに、「人間」は実は人文科学の発明に他ならず、それは人文科学それ自体とともに今や消滅しつつある、ということなのか。でもわれわれの大多数は、こんな意見はど吹く風といった顔でまだ相変わらず「人間をしている」ようにも見える。一体どうなっているのだろうか。

厄介な「人間」

実は、フーコーやレヴィ＝ストロースのような西欧文明に批判的な思想家達の予言とは裏腹に、この「人間」は、思弁の世界の外では、どこいしぶとく生き延びている。いやそれどころか急激な勢いで拡大しているときえ言える。その問題に入る前に、ここでこの「人間」の特徴をいくつか挙げてみよう。これは近代西欧で発明されたが、今ではグローバルに流通しつつある。その模範型は「自律的・啓蒙の主体」としての「個人」で、「自己」「自我」「人格」「心」「内面性」「主体性」「個性」「アイデンティティー」「エージェンシー」「自由意志」「自己責任」「自己規律」「自己管理」「自己決定」などと邦訳される西欧の諸概念は、この「人間」の属性となる。例えば近代法はこの「人間」を基盤としているので「善悪の区別がつかない個人」以外には刑事責任を求めないし、同時に「人間」としても認めない。また自分の死をも自己決定できるとする尊厳死はこの「人間」のなせる業である。身近なところとしては、近代の学校教育や職業能力開発の現場などではこの「人間」の模範型が席卷している。つまり、自分の責任と役割を明確に把握し、かつ創造性、主体性、決断力があり、個性的で自分の意見をはっきり表現でき、自己啓発を怠らない「人間」がそれである。最近ではなんとこれに「人間力」と呼ばれる項目まで加わっている。

一方このような「人間」の形成は明らかに管理側にとっては都合がいいことになるわけだが、必ずしも管理者が意図的に強要しているわけではないという点は重要である。この「人間」は他人の言いなりになるより、むしろ自ら望んで「主体的」にこういう「人間」になろうと自己規律に余念がないのだ。むしろ自らが自らの管理者になろうとしているのである。その結果他者に対しても同様の規律を求めていくようになる。この意味で、例えば国立市のように啓発的社会運動の盛んな所には「人間」が比較的多いと言えるかもしれない。

しかしこの「人間」には、大変厄介な問題がある。どう見てもこれは西欧近代の中産階級（ブルジョア）の道徳律がモデルとなっているが、好むと好まざ



るとにかかわらず、これが階級や地域の違いを超えてまさにグローバルに地球を覆いつくす勢いで広まりつつあるという事実だ。これを新たな植民地化と批判するにしても、格差拡大の要因として抗議するにしても、あるいはネオリベラルな合理化として折れるにしても、まず問わずにいられないのは、これがこのような「人間」とは異なる価値観や生き方の可能性を想像しにくくさせているという点だ。先述した「人間」を壊したいという人類学者の願望はたぶんここから来る。フィールドで想定範囲外の「人間の在り方」に出くわすと、我々のいう「人間」の方はいくら「自律的」「主体的」「自由意志」と言ってもやはり隷属状態にあることが判然とするからだ。再びフーコーによると、近代国家の支配が周到なのは単に「集団」として国民を支配するだけでなく「個人」としても支配できるような機構を洗練してきたからだという。われわれは懸命に「個性あるかけがえのない人間」を演じているかもしれないが、その代価には計り知れないものがあるかもしれない。しかしまた、だからといって、例えば今自分の子供がこういう「人間」にならないように期待する親はほとんどいないだろう。さらに言えば、今この文章を書いている自分自身が、部分的にもこの「人間」ではないと断言できようか。「人間」は極めて厄介である。

未決囚としての「人間」

それではこのかなり厄介な「人間」をどうしたらいいというのか。レヴィ・ストロースは「人間を溶解する」と言うが、それは高尚な論境界の出来事では終わってしまわないか。人類学者ならもう少し世俗的で具体的な次元でこの「人間」を相対化出来ないか。ただし相対化して物事がはっきりする場合もあるが、はっきりとした確信を邪魔して揺さぶることもできる。ここでは後者を少しだけ試してみる。というのも、はっきりさせるといって態度こそこの「人間」特有の属性であり、そのせいでそれ以外の「人間の在り方」がみえにくくなるからだ。

そこで具体的にまず思いつくのは、自分のフィールドワークのことではなく、

10年ほど前に英国で見たBBC2のNews Nightという「知識人」向けテレビ番組での報道である。5人の中高年の男性たちが体を傷つけ合って性感を高める行為をした廉により傷害罪で訴えられた。しかしそれが合意の下で行われていたことが判明し、また当事者たちはこれを「人間の可能性に対する実験」であったと主張したので、このケースは英国議会上院で審議されることになった。上院は最高司法機関の役割もあり、主として貴族や高位の聖職者からなる非公選議員で構成されるが、最近では「人生経験が豊かで洞察力のある」人物も議員となっているらしい。その特別委員会が調査した結果出した結論は無罪だった。その理由は「人間の可能性に対する追求ではなかった」とは言い切れない」というものであった。これを「人間の在り方」に対する未決定の表明ととらえてみたい。

それに絡んで、もうひとつの例を考えてみたい。それはこの夏学期に私が担当した『人類学』の期末レポートである。ある1年生の男子学生は最近自分が「二次コン（ブレックス）」であることに気づいたという。「三次元」（現実の異性やその映像）には「萌え」ず、アニメやゲームのキャラにしか情欲を感じないタイプの「二次コン」という「オタク」が存在することを私はこのレポートではじめて知った。本人は「三次元」に欲情することを不浄とすら感じてしまい悩んだらしい。また「初めて萌えた時には本当に揺らいだが、人類学の相対化の議論を学んで、自分の在り方に肯定的になれるようになってきた」とも書いている。以上2つの例はともに似たような話題になってしまったが、これこそが「人間のもうひとつの在り方だ」と言いたいわけではない。むしろ色々な「人間の在り方」にオープンで未決定であるということはどういうことなのかを感じ取る例として取り上げたに過ぎない。

このほか、最近のジェンダー研究からの「人間」に対する揺さぶりも同様に興味深い。これはもうよく知られている。従来の男女の区分はもはや自明視できない。セクシュアリティーに関しても然りだ。それでは「ひきこもり」はどうか。これも「人間の在り方」に未決定だと言う点で「人間」に対する揺さぶりになるのか。それとも「自己決定」しないと「人間」になれないこの社会の代価として「人間」を辞めさせられた「廃人」なのか。ただし歴史にはスゴイ「ひきこもり」は多い。ゴータマ然り、親鸞然り、それに多くの宗教的隠遁者がそうだ。彼らはこの世に戻って「人間の在り方」を変えた。

しかし「通世」せず「渡世」しながら「人間の在り方」に未決定でいたい。問題は、何かに囚われていると囚われていることに気づきにくいと言う点だ。つまり「人間」は実は「囚人」なのにそれに気づかず、「自由」に「自己決定」していると思っている。だからこうした「人間」の確信を疑い、揺さぶり続ける他ない。そうすれば、囚人であることは避けられなくても未決囚で留まり続けることはできる。これは「人間」に関する保留でも、凍結でも、宙吊りでも、棚上げでも、迷宮入りでも、不可知論でもない。どのような「人間の在り方」にもオープンであり続け、そこに強い関心を持つという態度に他ならない。





18年度開催の「如水ゼミ・自動車業界」では、トヨタ自動車からハイブリッドカープリウス、アルファードハイブリッドがキャンパスに登場。試乗会も行われた。

学生の社会理解を同窓会が支援する

「如水ゼミ」

第一線のビジネスリーダーが14講座で学生のキャリア形成をサポート

平成18年度から「社会人との対話によるキャリアゼミ」（通称：如水ゼミ）が開講されています。これは一橋大学の同窓会組織である「如水会」の協力のもとに、学生の総合的なキャリア形成支援教育の一環として開講されたものです。社会の第一線で活躍しているビジネスリーダーと受講生の対話を中心としたゼミスタイルの双方向授業で、理論とはまた違ったビジネスの実践的な理解を深めていきます。

具体的には、各業界のビジネスリーダーが自らの実務経験を通じて身につけた知識や技術、ビジネス哲学を学生にわかりやすく提示。それを素材にして講師と学生が対話をしながらビジネスのあり方を考え、自らのキャリアをイメージしながら個別具体的に考えていくというスタイルです。

学生にとっては、自主的で計画的な学習を通じて卒業後の自分のイメージを構築して、その具体化を進めていくことが容易になります。大学がキャリア形成の場としての機能をさらに強化するのに役立つ、時代のニーズに対応した講座といえるでしょう。



ビジネス界の先輩としての情報発信が 学生の資質向上につながればうれしいですね

新日鉱ホールディングス株式会社
代表取締役社長

高萩光紀氏

経営トップの話を 学生時代に聞く意味

私は如水ゼミの発足を賛成した1人です。一橋大学を卒業して実業界で活躍している先輩として、学生に何らかの発信をしたい。それが、社会における一橋大学の存在感を高めることにつながるのではないかと思ったからです。

大企業に入社すると、会社の経営幹部は雲の上ほど遠い存在です。私はたまたま企画畑にいた期間が長かったので、時々上司のお伴で社長や専務に会う機会がありま

した。しかし、一般社員は社長の話を聞くのは入社式ぐらいで、入社10～15年ぐらいは声すら聞いたことがないというのが普通です。学生時代にそんな経営トップの話を聞く機会があったら、もっとちゃんと聞いていたらよかったと思うに違いありません。

如水ゼミでは、ビジネスの第一線で活躍しているトップエグゼクティブが、実際の仕事や仕事の中から学んだこと、ビビッドな社会の見方を学生たちに伝えます。大学の先生方は理論的な側面からさまざまな知識を伝達してくれますが、それとは違った実務的な側面からビジネス界での生の声や考え方を伝えるのです。頭がフレッシュな学生時代に、大学の授業体系に入りきらないものに触れることは、理論と現実の折り合いをつけるのにどれほど役立つかしれません。

これは、学生たちが自分の将来の方向性を考え、もの

の考え方を深めるうえで大きなインパクトを与えることになるでしょう。

講師と学生が刺激し合う ゼミ形式ならではの効果

これまで一橋大学は国立大学として温室の中で暮らしていても問題はありませんでした。しかし、法人化によって競争の真っ只中に投げ出されてしまったのです。このまま手をこまねいては、学問のレベルが下がってしまうし、ステータスも下がってしまいます。

卒業生としては、自分たちが学んだ一橋大学が常にトップクラスでいてほしいと考えています。こうした危機感から、大学に何らかのサポートをしたいと考えたのです。その1つが、学生の質の向上に、大学の教員とは別な側面から資することができる如水ゼミです。大学側も配慮してくれて、このゼミを単位化してくれています。

如水ゼミは、現在14講座が開講されています。私も、「エネルギー」に関する講座を各社の専務、常務、部長クラスの皆さんと分担して行いました。通常1時間半の講座ですが、学生に伝えたいという熱意が余って予定時間を1時間もオーバーしてしまうことも珍しくありません。

実際に講義をしてみて、ゼミ形式の素晴らしさを実感しました。なぜ、ビジネスがそう動くか、その背景はこうだ、などと説明すると、学生一人一人がさまざまな反応を示します。中には、目を輝かせて高度な質問をしてくる学生もいます。実務を通じて得たものの考え方や哲学を直に伝え

ることが、それだけ学生に刺激を与えているのです。

他の大学に寄付講座を提供している企業も多数ありますが、そこでは数百人の学生の前で講義をするスタイルを取っているのが普通です。それとは違って、ゼミには学生に直接伝えられるよさがあるのです。単なる知識の羅列ならゼミスタイルで講義をする必要はありません。ですから、学生もある程度の覚悟を持って受講してもらいたいと思っています。

1時間半の講義録づくりには、その5～6倍の時間がかかります。講師側には事前準備の負担はそれだけ重いです。学生と接して大きな刺激を受けることで報われます。これは、我々にとっては大きなメリットといえるでしょう。



一橋大学のDNAを 脈々と伝えていきたい

一橋大学というと、キャプテンズ・オブ・インダストリーという言葉が脳裏に浮かんできます。学生時代には正直言ってよくわかりませんでしたが、社会に出てみると、一橋大学にはそのDNAが脈々と流れていることがわかってきます。それを絶やしてはならないのです。

如水ゼミは、まだスタートしたばかりですが、これが一橋大学の伝統になってくると、如水ゼミに魅力を感じて一橋大学を目指してくる高校生も増えてくるでしょうし、そうあって欲しいと願っています。(談)



学生の社会理解を同窓会が支援する「如水ゼミ」



平成19年度「如水ゼミ」

ゼミ（幹事）	夏学期	冬学期	協力予定企業
【1】銀行・証券（通年）	レポート	成績評価	日本銀行、三菱東京UFJ銀行、みずほコーポレート銀行、JPモルガン証券 他
【2】損保	成績評価		東京海上日動火災、損保ジャパン、三井住友海上火災
【3】生保		成績評価	住友生命、第一生命
【4】商社 (夏・冬学期の連続受講不可)	成績評価	成績評価	住友商事、三菱商事、三井物産、伊藤忠 他
【5】通信・情報システム (通年)	レポート	成績評価	CSK、NTT、富士通 日本経済新聞、総務省 他
【6】広告 (夏・冬学期の連続受講不可)	成績評価	成績評価	電通、博報堂
【7】エネルギー（通年）	レポート	成績評価	東京電力、東京ガス、 新日鉄ホールディングス、出光興産 他
【8】食品	成績評価		味の素、キッコーマン、 キリンビール、サントリー 他
【9】化学		成績評価	三菱化学、三菱樹脂、旭化成、 資生堂、花王 他
【10】マスコミ	成績評価		毎日新聞、NHK、小学館 他
【11】新規：国際関係		成績評価	外務省、JICA、NPO
【12】新規：不動産	成績評価		三井不動産
【13】新規：総合重工業		成績評価	三菱重工
【14】新規：総合物流	成績評価		日本郵船
【15】新規：陸上運輸		成績評価	JR東日本

平成19年度は如水会寄付講義「キャリアゼミ」という名称に変わります。





「ことば」という大海に船出して ～ことばの不思議は永遠の謎です～

ことばと付き合うそもそものきっかけは、3歳のとき父の転職に伴い一家で東京から東北の町に移住したこと。近所の女の子たちが誘いに来てくれるのに、何を言っているのか全くわからない、あの不思議な感覚、今でもはっきり覚えています。大きさに言うときあとき他者と自己の違いに目覚めたのかもしれない。

性格が適当なのかあつという間に適応してしまい、小学校の頃は友達とわざと方言だけを使う運動！なんてことまでやっていたほどです。でも家に帰ると東京ことばの生活。友達が家に来ると恥ずかしかった。

やがて変わったことばが勉強したくて東欧に憧れるようになり、大学ではロシア語を専攻。しかしそのうちに、特定のことばをマスターするだけでなく、ことばそのものの不思議や、ことばに取り組む人たちの世界にすっかり引きずり込まれてしまいました。中でも、方言研究の世界がとくに魅力的に思えたのは、多分幼児体験のせいでしょう。それで、回り道だけれども言語学を一からやり直し、それから東欧に行くことにして、大学院は言語学が専門の課程に進学しました。

ことばを理解することで広がる世界 小さな違いから解ける謎

大学院では机に向かう時間より、歩き回って足で稼ぐ研究生活。大半を東北の村や南の島で過ごしました。ことばを理解すると、それまで知らなかった世界が開けるような喜びが大きくて、ますます抜け出せなくなりました。ことばが入り口になって、食べ物や飲み物の味が変わったり、天候や風景による気持ちの変化が納得できたり、「感覚」が単なる想像でなく実感として共有できるような、そんな感じ。もちろん地元の人々からすれば錯覚でしかないでしょうが。

本学では専門のほかに語学教育も担当しています。今の大学教育で語学の習得、とくに英語以外の外国語学習に意義があるのか、いろいろ難しい問題があって、転機に来ているとは思いますが、教室ではこういう自分の体験が学生たちに伝われば、と思って努力しています。最近の学生はどちらかというの内向

きの傾向が強いので、少しでも普段体験できない刺激になれば、と思うのですが。

現在担当している社会学部の講義でも、社会科学でよく取り上げられる言語の問題、すなわち言語と民族アイデンティティであるとか、ナショナリズムなどの問題に行く前に、ことばそのものの仕組みをまず知ってほしいという願いから、最初は人間が駆使する音の不思議を取り上げることにしています。言語を理解するには言語音の理解が基本ですから。そこからわかることは、言語には言語のルールがあるということです。例えば、日本本土のことばと沖縄方言との関係を例にしてみましょう。言語独自の世界で見れば、両者の系統的つながりは明らかで、両者がもとはひとつの言葉から派生したことを誰も疑うことはできません。そして、そこではどちらが優位だとか、一方が他方を支配しているとかいうことは無関係。それらの要素はすべて人間の側、社会の側の都合です。私の仕事はまず材料の姿を示すことで、あとは学生たちが自分の体験や勉強によってそれぞれの見方を確立していけばよいと思うのです。

ことばが同じだから同じ民族であるとか、逆にことばが違うから違う民族だとかいうような言説も、人間・社会の側の都合で決まることであって、ことばが決めているわけではない、ことばの世界にいと当然の理屈ですが、社会の都合に言語が振り回される現実を目の当たりにして、そのあたりを若い世代にわかって欲しいと願うようになりました。それは私が旧ユーゴスラヴィアと深くかかわってきたからだと思います。

ことばがわかるからこそその悲しみ 希望と落胆の両方を味わった

私がまず留学したのは1970年代終わり頃の旧ユーゴスラヴィア。その頃のユーゴスラヴィアは東西対立の狭間で独自の社会主義を営み、特異な位置にありました。当時は経済も表面的には安定し、平和で自由で、そして何より文化の多様性がお国自慢という、日本のような国から行くと、理想の世界のようでした。方言学の先生について調査に連れて行ってもらったり、自分で企画・実行し

たり、ことばを入り口とする異文化体験を満喫しました。研究会で、いろいろな民族の研究者が皆それぞれ自分のことばで自由に議論し合う様が印象に残っています。

しかし、1980年代の終わり頃から次第にさまざまな矛盾が表面化し始め、遂には皆さんがご存知の悲惨な状況にまで至ってしまいます。今日では当時の諸勢力のプロパガンダや世論操作、メディアの役割などがかなり明らかになってきていますが、その頃の落胆はとても深いものでした。人間の都合が優先し、そしてあれほど自由闊達に議論した仲間たちが、あっという間に「敵」同士になってしまった。黒煙の上がる町の様子以上にショックでした。自分が拠り所にしてきた「客観」とは一体何だったのだろうか、と。

まやかに翻弄されず、 ことばそのものから 社会全体を見つめる

このときの体験は辛かったけれども、自分がすべき仕事を見つめなおすきっかけになりました。ユーゴスラヴィアも現在ではかなり落ち着いてきましたので、方言研究の環境も復活しつつありますが、今度は自分のほうが問題で、フィールドに出かける時間がなかなか自由になりません。目下研究作業の多くを費やしているのは、奄美諸島のひとつ、徳之島方言の記録を残すこと。これは学生時代の研究の延長で、昔の仲間と共同で取り組んでいるのですが、過疎化がますます進んでいる現状を見て、大切な記録作りを誰かがしなければと強く思ったのです。去年は文の記録を成果のひとつとして発表することができました。方言による表現の豊かさを見ていると、多様な視点の存在こそが人間の築いた文化の生命力の源泉ではないか、言語が教えているのはそのことなのではないかと、思えるのです。ことばの世界は、一度大海に船出してしまったら簡単には抜け出せません。



社会学研究科教授

中島由美

Yumi Nakajima

幼少期から思春期までを青森県弘前市で過ごし、通じない言葉を実験することで方言や言語に興味を持つ。東京外国語大学でロシア語を専攻後、東京大学大学院で言語学を専攻。方言研究の対象としてスラヴ語および、日本語の諸方言に取り組む。日本で数少ないセルビア・クロアチア語やマケドニア語の研究者でもある。



旧ユーゴスラヴィアから独立した小国マケドニアの教会の祭壇を飾る木彫レリーフ。伝統的な一本彫りの技法が用いられている。



研究室訪問

「万学の女王」の研究者を気取るより、
「オッさんホンマに哲学者」と言われるほうがずっといい

哲学を教えるドイツ語教師？

約6年のフランクフルト留学を通じて、ドイツで学んだ哲学の発想が身に染みついています。自己認識では私は「哲学を関心の対象とするドイツ学者」です。実際、言語社会研究科ではドイツ系の現代思想を担当していますが、学部ではドイツ語を教えています。

哲学というと難解で奥が深い——多くの人がそう感じているのは承知しています。しかし、その内実はかなり割りきして考える必要があると私自身は思っています。例えば、哲学者にどんな能力が必要なのかと考えてみます。「これ!」というものが思い浮かびません。そう言うと、「論理的思考が重要では?」という声が挙がります。確かに論理的に物事を考えることは不可欠ですが、それだけでは良いアウトプットは望めません。自分の経験を深く受け止め、「人の幸福とは?」とか、「生きる意味は?」といった、論理だけでは追求しきれない問題にもアプローチしなければならないからです。

では、なぜ私に哲学が教えられるのでしょうか。大学入学以来、ドイツ語で哲学書を読むトレーニングを受けてきたからでしょう。その中で、ドイツ語の文章を読む能力をある程度身につけ、哲学的テキストの言葉遣いに慣れることができたからです。そんなわけで、私の場合、「ドイツ語を拠り所にして哲学と(結構楽しく)格闘している」と言うのが、妥当なところでしょう。

紙と鉛筆だけでできる哲学

加藤尚武先生の最終講義でのこと。お嬢さんがこんなジョークを紹介されました

「数学者はよるしいですねと言われます。紙と鉛筆、消しゴムだけあればいいのですから、

この「思想のノート」と筆記具、独和大事典を手にカフェで本を読む。本の言葉を誘い水に思い浮かんだことを書きとめるため、ノートは必需品だ。千々に乱れた思考をメモするには4色ぐらいのボールペンが欠かせない。

と。でも、哲学者のほうがもっとよらしい。消しゴムもありません。」

哲学者には、それぞれが勝手なことを言っているだけという印象があるわけです。実際、プラトンの哲学、ショーペンハウアーの哲学というように、一人一人にオリジナリティが認められています。数学では「〇〇の数学」などとは決して言わないでしょうから、哲学の特殊性がわかるというものです。

かつて哲学は、「万学の女王」としてすべての学問の上に君臨するものと見なされていましたが、とりわけ17世紀頃からは自然科学の発展を無視することはできず、哲学的真理の探究にも消しゴムが必要になってきているのかもしれませんが……。

こんなジョークができるのも、哲学が、多くの人が関心を持つ問題を扱っているからです。「正義とは何か?」「時間は本当に存在するのか?」といった、必ずしも専門家でなくともアプローチできるし、せずにはいられないテーマを扱います。これが数学だと、その理論が専門家にしかわからず自分にはちんぷんかんぷんでも、全く腹が立ちません。ところが哲学だと、どうしても気になる話題であるだけに、わからないとしゃくに障るのです。

先ほど、哲学の内実は難しいだけのものではないと言いました。では、なぜ哲学書が難しいのでしょうか。一つには、正確に語ろうとするからです。言葉だけで正確に記そうとすると、どうしても話が細かく回りくどくなります。そのうえ、自分の特殊な経験をもとに書き表していることが多いため、共感しづらくなる面もあります。さらに、翻訳にも問題があるように思われます。ドイツ語で哲学書を読むと非常に明晰でわかりやすいことにしばしば驚かされます。ところが翻訳の過程で、難解な用語や表現が使われるようになり、それがいつの間にか日本における哲学書の基本的な文体を形作ってしまったのでしょう。

もっとも、哲学者の中には「自分たちは深淵で難解なことをやっている」というポーズを取りたがる人もいますから、哲学者自身にも責任があることは否めません。

こうして、哲学はちょっと近づきたい存在になっています。そこで、授業では極力、この近寄りたがたい印象を壊そうとしています。「このオッサンが、ホンマに哲学やっとなんか?」と思われるようなノリで授業をやり、学生諸君を(ソクラテスのように)哲学に誘惑したいとたくらんでいます。

入力-出力を身をもって示す

前任校の高崎経済大学では当初、「僕のゼミには来ないほうがいいよ。就職にプラスにならないから」と言っていました。ところが、就職委員になって企業の人事部の担当者と話してみると、哲学に興味があるという人が少なくありません。自分の哲学を披露してくれる人までいました。人事の人が期待しているのは、自分の考えをプレゼンテーションできる能力やコミュニケーション能力です。哲学を学ぶことはハンディにはなりません。

ただし、私は哲学を18歳から勉強を始めて一生続けるようなタイプの学問とは思っていません。何らかの切実な理由があって途中から哲学に転じることは、そう珍しいことではありませんし、実際に途中参入して大成した哲学者は数多くいます。

教師として私にできるのは、自分が思想関係のテキストをどう読んでいるかを具体的に示すことです。一語一語にこだわりながら、解説し解釈するとはどういう作業なのかを実演していきます。さらに、自分が読んだり考えたりしたことを、どう表現し出力していくかを示します。要するに、入力-出力をどうやっているのかを実践を通して示すのです。

人の幸福や人生の意味といった深刻なテーマに対して哲学者は偉そうなことを言っていますが、その割にはあまり説得力がないというのが実情でしょう。それを自覚していることもあって、哲学の歴史は反省の歴史です。カントが『純粋理性批判』と言う場合でも、自分たちに発言する能力・資格があるのか、と自己批判しているのです。

哲学には、ほかの科学のような意味での新発見はほとんどありません。常に自分たちが行ってきた作業の反省を行っているようなものです。こうしたイジイジと辛気くさいことをやっているところが私は好きです。

私自身は、キルケゴールとフランクフルト学派の研究を長らくやっています。学問の進歩に貢献するというより、自分自身と何とか折り合いをつけようと悪戦苦闘してきたというのが実態です。私にも消しゴムはいらないようです。(談)

言語社会研究科教授
藤野 寛
Hiroshi Fujino

京都大学文学部、同大学院文学研究科で哲学・倫理学を学んだ後、ドイツ、フランクフルト大学に留学(1988-1994年)。キルケゴールに関する論文で学位(哲学博士)取得。1997年-2006年、高崎経済大学経済学部にて勤務。2006年4月に一橋大学大学院言語社会研究科に移り、倫理思想論など、学部で初級ドイツ語・各国思想論(ドイツ)などを担当。著書:『アドルフ・ホルクハイマーの問題図』(勁草書房)、『アウシュヴィッツ以後、詩を書くことだけが野蛮なのか』(平凡社)など。



一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな活動を評価されている一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを描いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちの活動をご紹介します。

第14回は、NHKのディレクターや現地法人スタッフとしてマレーシアに関わり続け、

現在は大学院の博士課程でマレーシアの伝統芸能を研究されている戸加里康子さんにご登場いただきました。

聞き手は法学研究科の相澤美智子です。

食べていだけなら、何とでもなる。

自分の気持ちに正直に、いまできること、やりたいことをやる。ただそれだけです。



戸加里康子 (とがり・やすこ)

1988年一橋大学社会学部入学、1991年～1993年マレーシア・マラヤ大学留学

1994年NHK入局、国際局(現国際放送局)制作センター・地域番組部マレー語班

1999年研精舎マレーシア入社

2003年一橋大学大学院(社会学研究科地球社会研究専攻)入学、現在博士課程に所属

著作:情報センター出版局『旅の指さし会話帳15 マレーシア』

現地の人と現地の言葉で話したい。
それが、マレーシアに行ったきっかけです

相澤 高校の先輩後輩としておつきあいを始めてから19年になりますが、NHKを辞めてマレーシアで就職する、ご主人を残してマレーシアに再留学する、と多くの人はなかなか思い切れない選択をスツとなさるたびに、「何と伸びやかな生き方だろう」と内心拍手を送ってきました。そもそもなぜ、マレーシアなのですか。

戸加里 マレーシアとの出会いは、大学2年のときでした。東南アジアに一人旅がしたいと先生に相談に行ったら、治安も悪くないし、シンガポールでは近代化されすぎているから「マレーシアがいいんじゃない」と言われたんですね。先生がたまたまマレーシアへ行く予定があって、向こうで会おうかというノリでもあった(笑)。20日ぐらいの旅でしたが、初めての海外一人旅で、とにかくすごく楽しかった。知らない人と一緒にホテルに泊るとか、いま考えると人に薦められないような危ないこともいろいろやったけれど(笑)。

2度目は如水会の留学制度での留学でした。前期から途上国研究をやっていましたし、何となく現地へ行った方がいいという空気があったんですね。私も留学したいと思っていたので、じゃあどこ考えたとき、思い浮かんだのがタイとマレーシアの二カ国でした。途上国研究では、貧困からの脱出を妨げている要因は何かといった観点からの研究もあるでしょうが、私は経済発展しつつある国のいまに関心があつたんです。いまだうなっているのが実際に見たい、現地の人と現地の言葉で話したいと思ったんです。でも、タイ語は難しいから留学までに間にあいそうもない(笑)。如水会留学は1年でしたが、私費で1年間延長しました。

相澤 一橋大学に入学されたときから、途上国研究をやろうと決めていらしたんですか。

戸加里 途上国や社会開発への関心は、入学後でしたね。もともと明確な目的があって一橋を選んだというわけではなくて、社会問題について勉強ができそうだから社会学部へ進学した、という程度。当時、国立大学のなかで社会学部があったのは一橋だけでしたから、世界史の先生の薦めもあって、じゃあ一橋大学へ行こうという感じでしたね。

相澤 私が高校2年になったときには、戸加里さんはもう卒業されていました。でも、すごい先輩がいるよとお名前やウワサは私たちにも伝わっていました。東大へ行けと薦められませんでしたか。

戸加里 高校時代は、ヤンチャだったから（笑）。成績があがったのは、受験勉強したときだけ。いまさら志望先を変えたくなかったし、東大はまるで考えませんでしたね。でも、一橋を選んで良かったと思っています。女性を意識して行動したことがないから女子学生の数が少ないのも気にならなかったし、1年の前期からゼミで学べたことも私にとってプラスだったと思います。

いま行きたいと強く思ったから、NHKを退職しマレーシアに向かった

相澤 卒業後はNHKに就職されましたが、国際機関やNPOは考えなかったのですか。

戸加里 言葉を活かした仕事をするか、関心を活かした仕事をするか、考えました。でも、国際交流基金は縁がなかったし、最初に合格したからNHK（笑）。面接のとき、マレー語の放送をやりませんかと言われたんです。NHKは「ラジオ・ジャパン」という日本を海外に紹

介する短波放送番組をやっていて、日本から直接、電波を飛ばしていました。マレー語の放送自体、珍しかったと思います。

「ラジオ・ジャパン」ではディレクターとして、番組制作を担当しました。日本企業などを取材し、台本をつくり、スタッフを指揮する。アナウンサーはマレーシアの人でマレー語で会話をする毎日でしたから、マレー語の力もついたし、仕事そのものは面白かったですね。NHK

を辞めた理由の一つは、短波放送という媒体と番組を届けたい視聴者とのズレを意識するようになったこと。マレーシアの人口は約2300万人ですが、マレー語ネイティブの人はその半分ぐらい。ほとんどの人はインドネシア語がわかるんです。一方、短波放送を聞く人は「短波好き」

が多く、「音がキレイに入った」と内容よりも、そちらを重視する傾向が強い状況でした。もう一つは、人間関係に煮詰まってしまったこと。いま思うと、そこまでではなかったとは思いますが…。

相澤 辞められたあと、マレーシアの企業で働かれていますね。当時もうご結婚されていたと思いますが、単身で行かれるということについて、ご主人はいかがでしたか。

戸加里 夫は、私が暴れて行かせてくれと言ったと言いますが、私にはそんな記憶はない（笑）。マレーシアで働くことにしたのは、「いま行きたい」と強く思ったからです。マレーシア在住の日本人に紹介していただいて、日本のメーカーの現地法人に就職しました。

相澤美智子
法学研究科専任講師





相澤 マレーシアでは何年ぐらい働かれたのですか。

戸加里 1999年から3年半です。私は、日本人のエグゼクティブとローカルスタッフをつなぐコミュニケーション・スタッフとして現地採用されたわけです。でも、マレーシアの人がエグゼクティブになり、コミュニケーション・スタッフを介するの必要がなくなりました。役割もやれることもなくなったのに、居座っては申し訳ないでしょう。日本に戻ってマレー語を活かした仕事をしながら、もう一度大学で勉強しようと思いました。

私は本当に運がいい。
いつも応援してくれる人がいるから。
好きなことができています

相澤 もう一度学生に戻るといふ選択肢も、日本では少ないかと思いますが、戸加里さんがそうできたことには、経済的自立ができるだけの自信と能力の裏づけがあったからだと思います。

戸加里 確かに、マレー語の翻訳や通訳という仕事での収入はあります。でも、食べるだけなら、何とでもできる。いまの時代、普通に働いていたら、食べられないほど困ることはないと思いますね。私は、学生時代、先輩の代役でバイトをしたことがあるんですが、そのお店のご主人に頼まれて、それ以降1週間に6日働くことになった。そこで、仕送りがなくてもやっていける、6日勤務と勉強の両立はできると実感したんです。私はいまに至るまで、やりたいこ

とをやっている。やりたいと思ったとき、応援して下さる人にめぐりあうことができました。人にもよく言われますが、私はとても運がいいと思います。

相澤 人の信頼を獲得し、自然に応援したくなるだけの何かがあるからです。戸加里さんご自身も忙しいのに、いろんなことをやっておられる。NGOのお手伝いもされているそうですね。

戸加里 埼玉県朝霞市に、日本の小学生とマレーシアの子どもの交流をやっているNGOがあるんですが、そこで子どもたちの描いた絵のタイトルを翻訳するお手伝いなどをしています。私がやっているのは、その程度。やっている人がいて、面白そうだから手伝っている。結局、ヤジウマなんです(笑)。人のために何かをしてあげたいと思い、しかもそれを行動に移すのは、とても大変なことだと思いますね。

相澤 いま博士課程の2年目でしょう。大学院では何を研究テーマにされているんですか。

戸加里 マレーシアの伝統芸能、具体的には一部の州に伝わる「ワヤン・クリ」というかけ絵芝居です。かけ絵芝居ではバリ島やジャワ島のものがあるんですが、ワヤン・クリも長い伝統をもつ庶民の芸能なんです。演じるのは村や町の人びとですが、上演するときには芝居小屋を建てるんですね。その際、マントラを唱え、お供えをすることや、芝居の内容がイスラムにそぐわないと、15年前に州政府によって上演禁止になってしまいました。修士論文では、このことを州政府の政策という観点から考えました。この3月にマレーシアに再び留学するのは、この問題を今度は演者側の発言を通して研究したいと思ったから。一応、1年の予定で行きます。

相澤 博士課程を終えられたあと、研究者の道に進むとといったことは考えていらっしゃいますか。

戸加里 あり得ないとはいえませんが、率直に言って未定です。2つの国を言葉でつないで橋渡しをするといった、自分のできることをやる、そのとき面白いと思うことをやるというのが、私の基本的なスタンスですね。楽しいことをやるのは、どんなに頑張ったとしても、努力なんかではないと思う。これから先の人生にも、そうした楽しいことが、一杯あるといいなと思っています。

相澤 3月からの留学も、大いに楽しんできてください。本日は、どうもありがとうございました。

対談を終えて

戸加里さんは、私の高校・大学・如水会留学の先輩である。彼女との付き合いは、いつの間にかとても長いものになっているが、高校で出会った当初、彼女が日本とマレーシアの行き来を繰り返しながら、これほどまでにユニークな生き方を選択していくの

だとは、想像すらしなかった。今回、取材を通して、戸加里さんには何の気負いもないことに気がついた。彼女は、周囲が自分をどう見ているのか、自分に何を期待しているのかなどということに無頓着であるのはもちろんのこと、自分の中でさえ、将来を思い描いて、こうありたい、こうあらねばならないなどと思ったり、自分にプレッシャーをかけたらず

ることがない。毎日、楽しいと思えることを続けて、生きていく。と同時に、「食べるだけなら、何とでもできる」という腹のくくりもある。このとてつもない生命力と、人生を楽しむだらさ、これが彼女の魅力なのだと思えた。そういう魅力を持った先輩の生き方を、これからもずっと近くで見させてもらえそうなのが嬉しい。(相澤美智子)

個性は主張する

One and Only One

第 15 話

イラストレーター

ヨシダプロ氏



Yoshidapro

ヨシダプロをご存じですか

ヨシダプロって何者？という読者も少なくないと思いますが、ネット上のフリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』には、次のように紹介されています。

ヨシダプロ（よしだぶろ、1975年～）は、千葉県生まれの編集者、イラストレーター、漫画家である。東京都多摩市在住。

【略歴】

白井西中学校、千葉県立千葉高等学校、一橋大学卒業。某出版社の

地位や名声は関係ない。
金儲けのためでもない。
なんのためにやってんすかねえ。
人をくすっと笑わせたい。
それだけかなあ。



編集者をしながら、イラストレーター、漫画家、ライターとしても活動している。

【概略】

- ・飼犬は黒いラブラドルレトリバーのモモ（メス）。ただし実家で飼われているため、モモと戯れるのは月に1度程度である。
- ・@niftyの「デイリーポータルZ」にライター兼イラストレーターとして参加。ほかにも、mixiのWebマガジン「mikly」をはじめ、雑誌や単行本、テレビなど、幅広い媒体でその個性的なイラストを披露している。



・「本業の編集者の仕事より、イラストを描く方が好き」などと度々公言しており、社内での立場がやや心配ではある。

- ・ヨシダプロ曰く「会社ではアウェー」。
- ・入社時の挨拶は「好きなSMAPは中居君」。
- ・作品のモチーフとなるものはメガネ、犬、マンガ（主に集英社系）、芸能人等。モチーフ対象の情報収集のため、テレビはつけっ放し。
- ・所有するCDはほとんどミリオンセラー。ミリオンセラーを買っているのか、買うからミリオンセラーになるのかは不明。
- ・「お手数ですがどうぞよろしくおねがいたします。ではまた失礼いたします。」を文末に付けることが多い。

【好物】

- ・ロッテの「パイの実」、オムライス、豚バラが好物。基本的に自炊をしているようで、その料理の腕前はなかなかのものらしい。
- ・3度の飯よりmixiが好き。
- ・下戸。
- ・Mr.Children、BUMP OF CHICKEN等の音楽が好き。
- ・デスノートが好きで偶然なのか漫画の中にも「ヨシダプロ」が登場している。デスノートの所有者でもある。
- ・中学時代にはサッカー部に所属。漫画が上手なことで有名だったが、サッカーの技術も相当なものだった。授業中ノートに描いていたのは、主にジョジョやドラゴンボール。

【著作】

『教えて！メガネ君』（イースト・プレス、2006年6月刊）

[外部リンク]

ヨシダプロホームページ



「ウィキペディア」だけに、すべてヨシダプロ氏のファンが書いているのでしょう。人物紹介としてはちょっと型破りなところもありますが、こういう紹介のされ方（愛され方）をされるところに、氏の持ち味もあるのだと思われます。

なごみ系お笑いネタが人気

では、このヨシダプロ氏、どんな作品を発表しているのか？
手っとり早くは氏の個人運営サイト「ヨシダプロホームページ」

（「ホームページ」ではありません）にアクセスしていただければと思いますが、ここではさらに手っとり早く、そのホームページに再録されている膨大な作品群から一部を抜粋しておきましょう。

※@nifty「デイリーポータルZ」

※mixiのWebマガジン「mikly」

※ヨシダプロの「ひとり2ちゃんねる」

※『教えて！メガネ君』

※MSNのイラスト……などから適宜。

なごみ系というか、脱力系というか、ナンセンス系というか……。マジメそうでフマジメそうな、元気なようで侘しいような、ウソっぽいようでホントっぽいような……。古風な言い方をすれば、虚実皮膜の間を遊泳する氏のお笑いネタが今、若者たちの間で絶大な人気を博しているんですね。

ちなみに氏のホームグラウンドとも言える「ヨシダプロホームページ」は、『日経ネットナビ』誌の「本当に笑える面白サイト」で堂々の第1位を獲得したりしている、その筋ではかなりの有名サイトです。

……などという新歡オリエン的な前説はこれくらいにして、そろそろ本題に移ることにしましょう。とはいえ、短いインタビュー記事で、氏の摩訶不思議な人となりやどこまで浮き彫りにできるかどうかは保証のかぎりではありませんが。

会社での査定はいつもC

——日中は会社で編集の仕事をなさっているんですね。

「普段会社では、高校生向けの情報誌なんかの編集を手がけています」

——そういう教材や雑誌に、ご自分のイラストを使うことは？

「御法度です。そんなことをしたら叱られちゃう（笑）。それでも一応教育の会社なので、ふざけたマンガなんかは使えない。マジメなものをつくらされちゃう。そんなのキョーミないよというように（笑）。そこが会社勤めのつらいところですね。でも、逆に、そこがいいんです。会社では自由がきかない、つくりたいものにつくれない。そういうフラストレーションがたまって、その反動から、ゆがんだ創作活動が生みだされる。ハハハ。マジですね」

——創作活動は、ストレス解消のための趣味なんですか。

「そう言ってもいいんですけど、一応、それでお金もいただいています」



「ヨシダプロホームページ」



『教えて！メガネ君』
（イースト・プレス、2006年6月刊）

One and Only One

から、単純に趣味とも言えない。やっぱりそれも仕事のうちですからね」
——ご本人の感覚としては、どっちが本業で、どっちが副業なんですか。

「自分的にはどっちも本業ですよ。おかげさまで会社の査定はいつもCで、いつまでたってもヒラ社員のままです(笑)。でも、やるべきことはやっていますから、別に文句はないでしょ、みたいな(笑)」
——勤務時間外なら、どんな仕事をして、どんなに収入を得ようと勝手だと。

「ほんとダメなんですけどね、もうバレバレで、キミはしようがないなみたいなことになっています」

——ヨシダプロとしての仕事は、会社の主要な顧客である中高生にも絶大な人気を博しています。会社にとっては、いい宣伝材料になるんじゃないでしょうか。

「そのへんはビミョーです。会社のブランド・イメージとは確実に掛け離れていますからね(笑)」

——ちょっと扱いづらい社員なんですね(笑)。

「そうですね。会社では完全に浮いた存在になっています。アンタッチャブルな存在というか。でも、しょうがありません、そういうキャラなんですから、いいんですよ(笑)」

夜は寝るヒマもないほど忙しい

——会社勤めは仮の姿で、ほとんどの自分は家に帰ってからのほうにあると。

「そうですね。でも、そういうサラリーマンって、けっこう多いんじゃないかなあ。別にほくにかぎった話じゃないと思いますが」

——そうはいつでも、家に帰ったらまた別の仕事があるというサラリーマンは、そう多くはありません。

「そこが単なる趣味と違ってきついところですね。まず、会社での仕事と家での仕事との切り替えがむずかしい。使う脳の部位がまるで違いますから。それに、ヨシダプロの仕事は、おかげさまでというのか、連載だけでも5つくらいあって、けっこう忙しいんです。帰宅時間は急いでも7時くらいになっちゃいますから、それだけの

仕事をこなすにはぜんぜん時間が足りない。睡眠時間を削るしかないということになっています」

——ヨシダプロ作品のファンの間でも、いつ寝ているんだろうということが話題になっているようです。

「mixiなんかをやっていると、ぼくが真夜中にも起きてることはわかっちゃいますからね。こいつ、バカじゃないかと思われてるんじゃないでしょうか(笑)。実際、寝ずに働いて、からだを壊して、しょっちゅうぜんそくの発作に襲われたりしている。きついですよ、ほんとに。ぜんそくは、人としてへこみますからね」

——それでも、会社勤めをやめるつもりはない？

「根が保守的なんですよ。それなりにマジメ人生を歩み、安定した収入を確保しつつ、というスタイルが性分にあっているんですよ」

——それにしても、かなりフマジメな勤め方に思えますが(笑)。

「まあね(笑)、会社勤めは安定収入のためと言いながら、実際には、いまやどっちが副収入だかわから

ないくらいになっている。それに、ぼく、お金はほとんど使わないんです。ぜんそくの薬代くらいしか(笑)。ですから、収入面のことだけでいったら、いつ会社をやめてもいいんですけど、会社勤めは必要悪っていうのかなあ、それが創作活動のエネルギー源になっていますし、作品のネタにもなっている」

——会社勤めがなければ、ヨシダプロとしての仕事も成り立たないと。

「そこまでは言えないにしても、会社勤めがパワーを生み出す源泉になっているというのは確かなことで、そういう意味でも就職したほうがいいですよという前向きなメッセージを後輩諸君に送ったりして。ハハハ」

大学ではヘンなメディア活動に熱中

——ホームページの自己紹介によれば、一橋を受けたのは単に受験科目が少なかったからだ。

「申し訳ないんですが、そうです(笑)。予備校では一応スーパー東大クラスにいたんですけど、社会科学を2つは、やる気がなくて、



1科目で受験できる一橋にしたんです」

— 現役の時には、入試そのものを受けなかったか。

「前期の試験はちゃんと受けたんですが、後期の願書をついいうっかり出し忘れちゃったんです(笑)。あれ、見落としやすいんですね。単にぼくがおちよこちよいなせいかもしれませんが(笑)」

— 大学受験に対する拒絶反応みたいなものがあった？

「いや、勉強自体は嫌いじゃなくて、むしろ進んで受験戦争の場に身を置いていました。まあ、一種のゲーム感覚なんですかね。ゲームでキャラクターの戦闘能力を高めるのと似た感覚で、みずからの偏差値を高めることに熱中していた。それでいて社会科2つはいやというのは、ハハハ、ちょっと情けない話ですかね」

— 一橋に入って、最初の自己紹介で「気安く声をかけないでください」と言ったら、ほんとにだれも声をかけてくれなくなりましたそうですね(笑)。

「マジメなメガネさんたちには冗談が通じないんですよ。もっとも、ぼくもメガネをかけていますが(笑)。それやこれやで、対人関係で大きく出遅れました」

— 大学は、生涯にわたる友人と出会う絶好の場所だという見方もあります。

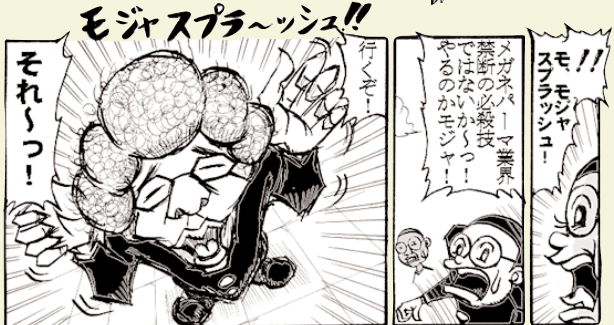
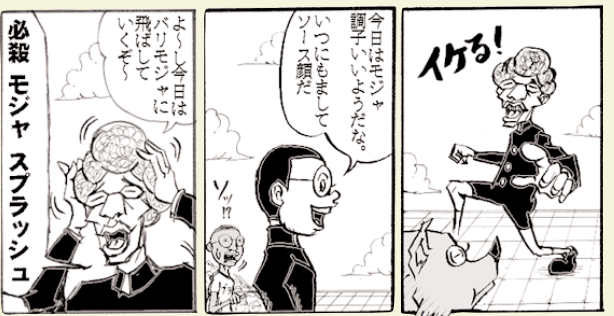
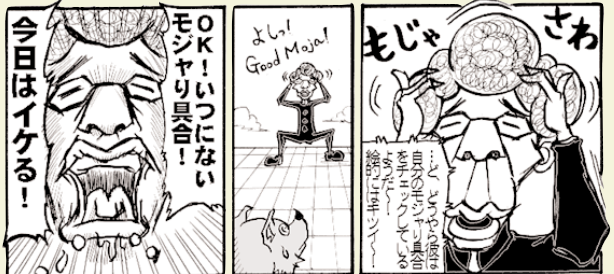
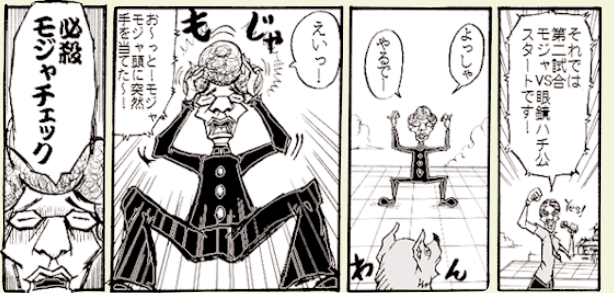
「友だちは、いなかったですね。さすがに親友はいましたけれど、大勢で群れるということはぜんぜんなくて、たいていは一人でいましたね」

— 一人で何をしていたんですか。

「サークル活動です。一人サークルというウソサークルなんです(笑)。新歓シーズンになるとウソの勧誘ビラをつくって撒いたり、タモリ来るというようなウソの立て看板を書いて校門のところに出したりというようなヘンなメディア活動をしていました。とくにウソ看板はよく書きましたね。あと、非公式の学内誌をつくらたりとか」

— 反響は？

「わかりません。たぶん、そんなことやって何が面白いんだと思われてたんでしょうが、自分ではそれがけっこう楽しかった。ハハハ。ヘンタイですね。そのうち、立て看板は、キミはちゃんとしたことに使わないからと、貸してもらえなくなっちゃいましたが(笑)、ちゃんとしたサークルからちゃんとした勧誘ビラを書いてくれという注文もくるようになって、それか



One and Only One

ことですね、<ヨシダプロ>を名乗るようになったのは」

勉強も遊びも暇つぶしのためだった

—授業のほうはどうだったんですか。

「出ましたよ。けっこうマジメに(笑)。学校の勉強は、中学生の頃からわりとちゃんとやる子だったんです。ノートは落書きだらけだったんですけどね(笑)。当時の落書きノートはWebで公開したりもしていますが、絵を描く技術はそういう落書きで磨いたといってもいい」

—少年ジャンプの熱烈な愛読者だったそうですね(笑)。

「今も読みつづけています。小学生の頃にドラゴンボールの連載が始まったんですが、大学1年の時に終わってしまって、あれはショックでした。あれが、ぼくの人生の最大の岐路だったのかもしれない。マンガと訣別するか、しないかという(笑)」

—中学時代はサッカー部に所属していたとも聞いていますが。

「でも、チームメイトが好きだったわけじゃないし、体育会系のノリも嫌いで、一人練習法をいろいろ編みだしては一人で黙々と練習していた。ハハハ、困ったサッカー少年でした」

—勉強もするけど、マンガも好き、サッカーも好き、音楽も好きだったんですね。

「音楽ではミスチルとかね。要するに、はやりものが好きなミーハーなんです(笑)。それ以外にもテレビのバラエティ番組が大好きで、テレビはよく見ていました。ぼく、『ながら』ができるタイプで、テレビを見ながらでもそれなりにちゃんと勉強はできるんです」

—だから今も、会社勤めと創作活動をちゃんと両立できているんだと(笑)。ホームページを始めたのはいつ頃からですか。

「大学4年の時、就職活動が終わってからです。一橋って就職がけっこう早く決まっちゃうでしょ。ですから、ほかにやる事がなくなって、その頃はやりはじめていたインターネットなるものをぼくもし

てみようかということ。とことんミーハーなんです(笑)」

—その時に開設したホームページが今も続いているんですね。

「ぼくがつくっているホームページはアホサイトなんです(笑)が、当時はほかにあんまりなかったせいか、けっこう珍しがられて、メジャーなところからもイラストやコラムの注文をいただくようになったんですね。それが発展して、最近ではWebや雑誌に作品を発表するだけでなく、新宿のロフトワンプラスなどでイベントを行ったりもするようになってます。ヨシダプロのいんちきマンガ教室とか、あやふやディナーショーというような看板を立てて(笑)」

「人をくすつと笑わせたい」が働くことの原動力

—今のヨシダプロのベースは大学時代に形成されたといっているんでしょうか。

「まあ、そういうことにしておいてもいいんですが(笑)、振り返ってみると、中学から高校にかけての多感な時期に、テレビでダウンタウンの洗礼を受けたということが今のベースになっているんじゃないのかなあ。松っちゃん、スゲーみたいところから、ものごとをすべて一歩退いて見るようになった。うーん、やっぱり、ダウンタウンから受けた影響が決定的に大きいですね(笑)」

—最後に、ちょっと白々しい質問になりますが、なんのために仕事をしているんですか。

「あんまり考えたことはありませんが、地位や名声のためじゃないことは確かです。お金儲けのためでもない。なんのためにやってるんですかねえ(笑)。ただ、つねに心がけているのは、人をくすつと笑



「お手数ですがどうぞよろしくおねがいたします。ではまた失礼いたします。」



◆プロフィール

ヨシダプロ。本名は吉田英史。1975年千葉県生まれ。1999年一橋大学社会学部卒業。同年某大手教育系出版社に入社。編集者として情報誌の編集などを手がけつつ、帰宅後はヨシダプロの名前でイラストレーター、マンガ家、ライター、ホームページャーなどとして活躍。なごみ系のお笑いネタが人気を博している。

◆ホームページアドレス

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~e-yoshi/>

『力か対話か』 —異文化交流は「文明の衝突」を防ぎ得るか—

昨年夏、あるNPOの主催する講演会で本書の編著者・川本皓嗣氏のお話を拝聴する機会があった。

講演は「日本人はユニークか？—日本論の背景」という題目で行われたが、異文化間カウンセリング心理学の分野に身を置く自身を省みるお話であった。といっても、本書は決して心理学や異文化間教育に関するものではない。

2004年の大手前大学国際文化フォーラムでの多彩な分野からの演者の講演、討論をまとめたものである。



『力か対話か—異文化交流は「文明の衝突」を防ぎ得るか』
川本皓嗣／編著 中央公論新社刊 定価：1,575円（税込）
2004年4月10日発行（紙版中）

「日本文化は難しい」と信じる 日本人の背景にある劣等感

現在では「外国からどう見られているか気にする日本」「外国人にとって日本文化は難しいと考える日本人」といった日本人論・日本文化論は通論となっている。しかし、本書はその日本論に焦点を当てたのではなく、なぜ日本人がそのような考え方を持つに至っているのか、という点を「日本人のマージナル意識（周辺国意識）が高じた劣等感」として論じているところが興味深い。周辺国意識を保身するため、日本人はユニークであるという独自性の鎧を着るのではないかと本書は語る。つまり、大国は常に自分たちが如何に普遍的でありどこでも通用すると主張していればいいのだが、日本の周辺国意識からは防衛手段としてユニークさのアピールが出てくるというわけである。

この周辺国意識の出所につながる各人の見解には説得力がある。「グローバリゼーション」という際、アメリカやイギリスでは自分たちのスタンダードでグローブ（地球）を覆いつくすことを「グローバリゼーション」と呼び、反対

に日本では武力や経済力において強い国々に基準を合わせることをこう呼ぶという意見や、明治維新以降のオランダから欧米へのシフトや戦後アメリカへ寄り添うといった日本体制の指摘、「西洋と日本」「欧米と日本」というバランスを欠いた二極化など、私たちがいかに強国を通して世界を概観しているのかが分かる。これらはいわゆる強国や日本を離れ、それ以外の国々での活躍を経た各論者ならではの視点だからこそ説得力があり、さらにはユーモアたっぷりに火星人との比較による地球人意識にも発展させられるのであろう。

自文化に誇りを持ってれば、 ことさら自文化を 強調する必要はないという視点

私の受け持つ講義では異文化接触でのコンフリクトマネジメントを取り扱うが、コンフリクト解決のための重要な要素の1つに心理学という自尊心が挙げられる。劣等感と自尊心は対

局する概念ではないが、一個人を一文化に置き換えてみると、この周辺国意識は、自文化を中心に据えられず、自文化に対して自信を持ってない、つまり「自文化尊心」が低いとも言えようか。個人の自尊心同様、自文化のありのままを愛すべき存在と認められるようになれば、日本文化の独自性をことさら強調する必然性がなくなるかもしれない。アイデンティティをそれほどまでに主張し、他との違いを強調する必要があるのか、独自性を持つという考え方自体も他からの輸入であり、このレールに乗って独自性を出すことは本当に独自だと言えるのかという本書の問いかけも、現代の風潮においては新しいものであろう。

対立を対話で解きほぐすという 手段の提案

しかし、本書は文化・文明の比較、そこからくる対立・衝突の回避を促しているのではない。力で排除する、または意見を通すのではなく、対立を対話で解きほぐすことの重要性を説いている。「寛容」（他を認める）には相手への理解が必要であり、理解しあう場には対立も必要であり、対立を生むためには異なる考えとの接触が必要である、というのが本書への私の理解である。その他、「遡及的本質化」という概念も本書の核をなすメッセージとして受け取れる。現在の価値判断において必要なものを、以前から重要なこととされてきたものとしてすり替え、強要する自己欺瞞をこう呼んでいるが、ここでも「文化」が利用され、濡れ衣を着せられているという。考えてみると思い当たる例が多くあり、「遡及的本質化」という概念により、事象を別の角度から捉える視点を持つことができるようになる。

私にとって本書は、自己変化の可能性を恐れない自文化、自社会に対する自信と、相手文化の尊重とは何かを新たな視点から省みる機会を提供してくれるものとして、繰り返し目を通したい一冊である。



『若き数学者のアメリカ』

本書を読むことになったきっかけは、著者のベストセラー本（『国家の品格』）に触発された妻が買って来たことでした。読んでみると自分自身のアメリカ留学時代が本書の内容と重なるように思い出され、うなずいたり笑ったり、感じるどころが実に多い作品でした。私が本書の舞台であるアナーバーとボルダーを訪れたことがあるということも影響したのかもしれません。広く知られている書物なので今更の感もありますが、誰でも手軽に読める有意義な本としてぜひ紹介したいと思います。

「国家の品格」の著者 藤原正彦氏のアメリカ留学記

本書の最も簡単な紹介としては、いまや知らない人はいない藤原正彦氏がまだ若かりし頃、アメリカの大学に留学した体験記ということになるでしょう。内容は大きくふたつに分けることができます。ひとつは留学先の大学の描写。同僚教授たちの行動、学生との交流や軋轢、キャンパスライフ、大学内部世界の分析などなど…現実の出来事をベースにしながらビビッドに描かれており、さながらアメリカの大学エスノグラフィといった趣きですが、一步引いた客観的な分析も加えられています。もうひとつは、近所の子供たちや家族、旅先での見知らぬ人々とのさまざまな交流です。こちらの方では、著者の持つバイタリティと感受性に大いに感心させられています。

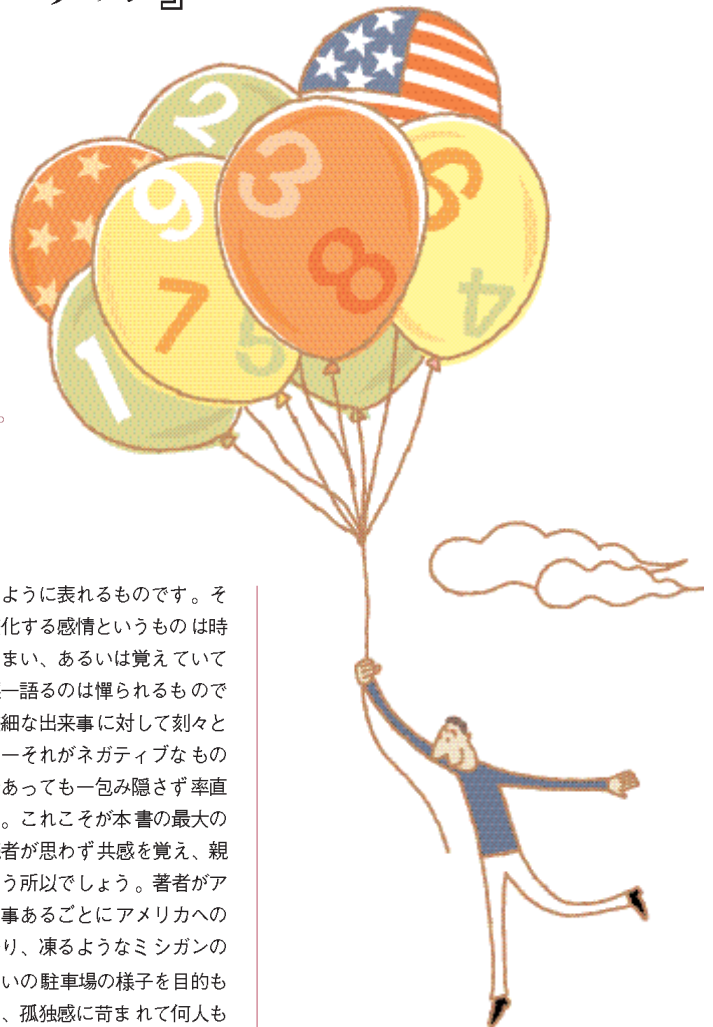
些細な出来事、 感情の機微を包み隠さず

特筆すべきは、通常の留学体験記とは明らかに異なるものがあるということです。まず、アメリカの大地の情景や著者の接する人々の様子が、細やかな描写によって生き生きと目に浮かぶがごとく描かれていること。そして何より面白いのは、著者自身の感情の機微が驚くほど繊細に表現されていることです。自分自身のことを振り返ってみても思うのですが、はじめて異文化と相対した時というのは、複雑で微妙な、何とも表現しがたい感情が、

心の中で渦を巻くように表れるものです。そのような瞬時に変化する感情というのは時が経つと忘れてしまい、あるいは覚えていても他人に対して逐一語るのは憚られるものですが、著者は、些細な出来事に対して刻々と湧き上がる感情を—それがネガティブなものや不謹慎なものであっても—包み隠さず率直に告白しています。これこそが本書の最大の面白味であり、読者が思わず共感を覚え、親近感を抱いてしまう所以でしょう。著者がアメリカ到着直後、事あるごとにアメリカへの対抗意識を抱いたり、凍るようなミシガンの冬休み、家の向かいの駐車場の様子を目的もなく毎日眺めたり、孤独感に苛まれて何人もの女性に声を掛けたりするなど、ナーバスで感傷的になっている様子が生々しく伝わってきます。異文化体験の過程では多かれ少なかれ、誰でも一時はこんな状態に陥るものではないでしょうか。私自身、異人種の中での孤独感、ちょっと歪んだ日本人アイデンティティ、はじめて経験する物事への驚き、根拠の曖昧な劣等感…留学時代にその時々でさまざまな感覚に襲われ、それらが自分の中で揺れ動き、しばしば混乱していたことが思い出されます。

日本人らしく自然に振舞うこと

本書の最後の部分では、アメリカ滞在中で著者の心理状態がどう変化していったのかが回顧されるとともに、アメリカ人やアメリカ社会に対する鋭い分析が展開されていて読み応えがあります。最も印象に残ったのは、



結局、日本人らしく自然に振舞うことが異文化の中で受け入れられる秘訣だと述べている箇所です。分かっているようで、簡単なようで、実践することはなかなか難しいものですが、うなずき納得させられてしまうのは、きっと、著者の苦悩と喜びのプロセスを追体験できる本書ならではの叙述が理由ではないかと思いつつ、気がつくときまさに追体験していた私でした。



『若き数学者のアメリカ』（新潮文庫）

藤原正彦／著 新潮社刊 定価：540円（税込）1981年6月25日発行（2003年改版）

『大欧州の時代—ブリュッセルからの報告—』 『中国・アジア・日本—大国化する「巨龍」は脅威か』

もう30年近くも前、まだ学部の学生だった私は、以前から持ち続けていたヨーロッパへの興味と自分の専攻する経済学との折り合いを何とかつけようとして、欧州共同体（EC：後の欧州連合 [EU]）の経済政策を研究テーマにしようかと考えていた。しかしそうした自分に、その頃たまたま訪れた「欧州の中心」であるブリュッセルの町は、何か中途半端な印象しか残さなかった。

その後私は日本の大学を「ECの通貨統合」と題する卒論を書いて卒業し、企業に3年間勤めた後大学院に入ったが、今度は経済学ではなく、ヨーロッパの中世を学ぶことを決心したからだった。高校の世界史でちらと触れたに過ぎなかった「ヨーロッパ」と、今度は正面から向き合うことになった。「ヨーロッパ」と向き合いながら、ECの原加盟国とは、実は「フランク王国」だったという—半ば当然の—ことにはっと（やっど？）気付き、ECは拡大しても、その中核は西ヨーロッパであり、カール大帝なのだということを強く確信するに至った。

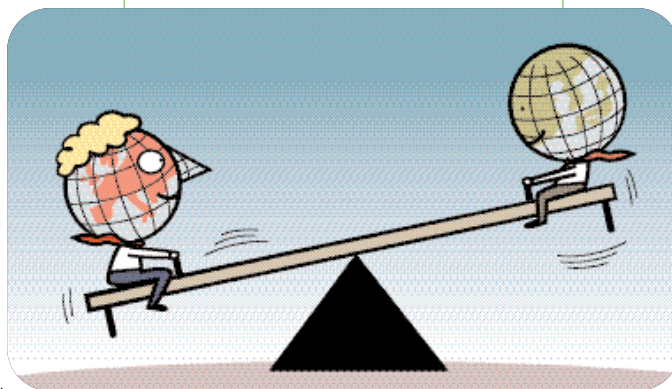
EUは「フランク王国」の拡張なのか？

それからまた幾年も過ぎ、ECはEUと名を変え、私の学部学生時代にはまさかと思われた通貨統合も共通通貨ユーロという形で結実し、今年2007年の1月にはブルガリア、ルーマニアをメンバーに加え加盟国は27となり、EUはまさに大欧州となってしまった。この大欧州は「フランク王国」の拡張なのだろうか、それとも何か別のものなのだろうか？…この問いに直接には答えてくれないものの、多分それに答えを出すヒントを与えてくれるのが脇坂紀行『大欧州の時代—ブリュッセルからの報告—』（岩波新書）である。著者は朝日新聞のベルギー・ブリュッセル支局長を5年に亘り勤め、EUの内情には精通している。本書は現在のEUに必要なとされる巨大な通訳・翻訳者集団や当地に集まる数多くのロビイスト達、最近ではイラク情勢に関心が向けられる欧州外交、はたまた2005年にフランスとオランダで否決されてしまった欧州憲法に至るまで、現在の大欧州を様々な局面から、透徹した眼差しをもって語ってくれる。米ソ両超大国の対立を軸に世界が構成されていたように見えた時代もかなたに過ぎ去ってしまった今、アメリカの一人勝ちの状況やその延長としてのグローバリゼーションに異議申し立てをするEU。それはもはや近代的な国民国家の寄り合い所帯ではありえない、21世紀の課題と向き合うためのゲマインシャフトとしてある。こうしたEUを理解するために、

国民国家成立以前の中世（西）ヨーロッパに視線を向けることもまた、あながち見当はずれのことではあるまい。

東アジア共同体は、EUに匹敵する力となりうるか？

21世紀の世界の有力な構成要因たりうる地域ブロックとしての欧州連合。しかしそうした



地域ブロックの可能性がEUのみに限られないだろうことを、著者は本書の「エピローグ—二つの共同体—ヨーロッパと東アジア」で示唆している。最近しばしば話題にのぼる「東アジア共同体」は政治的概念としては「ASEANプラス3」（東南アジアと日中韓）とも言い換えられるが、それをEUの等価物とただちに見做すことは確かに早計であろう。域内の経済格差がEUとは比較にならないほど大きいことに加え、文化・政治的にも「ラテン的中世」を背景に持ち、そこでラテン語というリングア・フランカ（共通語）を土台として均一な地域を形成してきた西ヨーロッパに対し、東アジアは

圧倒的な文化・政治・経済力を誇る中国とその周辺の朝貢国家からなる、中華（中心）世界であったからである。

しかしそうした経済的、歴史的背景の違いにもかかわらず、世界情勢の流れは東アジアでの地域ブロック形成へと否応なく急がせる圧力をもって迫ってきている。もし近未来に「東アジア共同体」が具体的な形を持って形成されねばならないのであれば、そこでは中国はどのような位置を占めることになるのだろうか。再び東アジアの盟主として立ち現れるのだろうか。天児慧『中国・アジア・日本—大国化する「巨龍」は脅威か』（ちくま新書）は最近の中国における反日感情、それに呼応するように現れた日本人の反中感情を読み解くことから始め、中国の増大する軍事力と持続的な高度経済成長、その背後にある構造的な問題、さらには積極化する中国外交について述べ、ありうべき「東アジア共同体」にあって、日本と中国はどのような役割を果たさねばならないかに考察を及ぼす。現

代の政治経済情勢及び歴史的与件を冷静に捉えれば日中両国がそこで相互補完的役割を果たさねばならないのは明らかであり、中国の識者もそれを当然の前提と考えていると著者は述べる。しかし歴史は必ずしも合理的・理性的に動くとは限らず、仮に両国のエゴの張り合いといった事態が深刻化すれば憂慮すべき結末を招きかねないのである。日本にも真の意味で先見の明をもった外交姿勢が必要とされているのだろう。

東アジア共同体は欧州連合のような均衡をもち、21世紀における有力かつ有益な地域ブロックとなることのできるだろうか。



『大欧州の時代—ブリュッセルからの報告—』（岩波新書）脇坂紀行／著 岩波書店刊 定価777円（税込）2006年3月22日発行
『中国・アジア・日本—大国化する「巨龍」は脅威か』（ちくま新書）天児慧／著 筑摩書房刊 定価735円（税込）2006年10月4日発行

文化勲章を受章して

一橋大学名誉教授・統計研究会会長

篠原三代平先生

篠原三代平（しのはら・みよへい）

統計研究会会長・一橋大学名誉教授・東京国際大学名誉教授

1919年富山県生まれ。1940年高岡高等商業学校卒業、

1942年東京商科大学（現一橋大学）卒業。

1950年一橋大学助教授、1962年一橋大学教授、

1970年経済企画庁経済研究所所長、

1973年成蹊大学教授、1985年東京国際大学教授、

1988年日本学士院賞受賞、1989年勲二等瑞宝章、

1998年文化功労者、2006年文化勲章受章。

ファクト・ファイディング重視の
ボトム・アップ的な実証研究を60年間続けてきました



統計グラフづくりの過程で 人の気付かない課題を見出す

8年前に文化功労者に選ばれたときも、私には身分不相応だと思ったほどですから、文化勲章の受勲は、正直言って夢にも思っていませんでした。一橋大学では、増田四郎先生が文化勲章を受章していますが、師匠にあたる中山伊知郎先生でも文化功労者どまりでしたから、なおさらです。長生きをしてよかったですしみじみと思っています。

推薦委員会の評価では、ファクト・ファインディングの中から、他の経済学者がまだ気付いていない経済の法則を探し出すという実証分析の積み重ねこそが、私の研究の特徴だそうです。振り返ってみれば、この60年間は統計からグラフを描き出すことによって、他の学者が気付いていない課題を見出してきました。経済企画庁で経済研究所長をしておられた貞廣彰氏（現早稲田大学政治経済学部教授）は『戦後日本のマクロ経済分析』の序文に、「経済分析で重要なのは、まずグラフを描くことだ」といった趣旨のことを書いています。私も、60年間一貫してそれをやってきたといえます。

大熊先生が経済の目を開かせ 中山先生が一定の到達点に導いた

私の経済に対する目を開かせてくれたのは、高岡高商時代の熊信行先生でした。資源配分の理論に感銘を受けたのです。理論面を私を絞り上げて、一定の到達点に持ってきてくれたのが一橋大学であり、中山伊知郎先生だったのです。なお、大熊先生は中山先生の論敵といわれていますが、私の中ではお二人の理論は相互に喰い違っているとは思いません。

中山伊知郎ゼミでは、ケインズやハイエク、シュンペーターなどを原書で読みあさりしました。現在でも、ケインズ派やハイエク派に分かれる傾向がありますが、私は条件が揃えばケインズ理論とハイエク理論は両立すると考えています。

昭和17年9月に繰り上げ卒業。東亜経済研究所の無給嘱託に任じられて、応召しました。戦後は、大蔵省の財政経済実勢研究室の嘱託として、戦争直後の時期のインフレ見通しや、その時期の資金循環などの分析を担当しました。これが実証分析のいい訓練となり、60年間にわたる研究の基礎になったといえます。そして、1950年から一橋大学の経済研究所で実証分析を行うようになったわけです。

経済研究所が作成した『長期経済統計』全14巻では、『個人消費支出』『鉱工業』の2篇を担当しました。明治時代はデータが少なかったのが苦労しましたが、これによって明治以来の国民所得推計ができました。ちなみに、この14巻は日経・経済図書文化賞の特別賞を受賞しています。

学士院賞を受けた『日本経済研究』（筑摩書房）では、成長と循環、産業構造の実証研究も含まれています。最近の『長期不況の謎をさぐる』（勁草書房）『成長と循環で読み解く日本とアジア』（日本経済新聞社）など

も、一貫して現実からのボトム・アップ的な実証分析を行っています。ノーベル経済学賞では、トップ・ダウン的な理論分析に優れた学者が数多く選ばれていますが、私はまさにその対極の分析をしたといえるでしょう。

なお、かつて私がケインズ著『一般理論』の数式のエラーを発見できたのも、理論と実証分析を併せて行ってきたことが役立っています。

多面的、論争的、パイオニア的な 私の著作スタイル

中山先生は多作で有名です。戦争直後に先生に教えていただいたのですが、イギリスの社会学者G.H.コールドがある本で、「Nothing competes with my pleasure of writing books」と書いていて、この言葉が気に入っているといわれたことです。何とかこの言葉を原本で捜したいと思ったのですが、見つけれませんでした。私もこれまで、40冊の単行本を上梓し、そのうち7冊は英書です。今回、一緒に文化勲章を受章した瀬戸内寂庵さんの400冊には及びもつきませんが、私も経済学分野では中山先生の多作傾向を受け継いでいるといってもいいでしょう。

なお、私の著作の特徴は、理論と実証の相互交渉の産物であること。そして、一点集中型ではなく多面的であること。統計グラフをつくり上げていく過程で人の気付かないポイントを見出して仮説を立てていますから、当然ながらパイオニア型で、論争的な著作が多いのも特徴的です。

これからの時代は 英語と中国語が武器になる

私は、数学は苦手でしたが英語ができましたから、高岡高商から一橋大学にすんなりこられました。

学生には、「ボーイズ・ビー・インターナショナル」で、英語がスムーズに出るようになってもらいたいと思っています。

2020年～30年には中国経済もテイクオフして、日本レベルになるでしょう。また、成長著しいインドでは英語が通用します。ですから、英語に加えて中国語もできれば大きな武器になるでしょう。

大学院生には、理論的には正反対といえるような対照的な経済学者をも取り上げて比較研究を進めてほしいと思います。そして、ある時点からは理論を超えて実証分析を行うことです。それが研究の厚みを増すために必要と考えます。（談）



一橋大学基金へのご協力、心より御礼申し上げます。

卒業生、在校生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2007年2月16日現在で、総額約3億6,000万円に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2006年12月から2007年2月16日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載していません。また、ご寄付者で万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡下さい。

また、この度、皆様の寄付金を財源とした、本学独自の「学業優秀学生奨学金制度」を創設することができました。重ねて御礼申し上げます。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に末永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に関しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。

なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

学業優秀学生奨学金制度の創設について

■ 制度創設の目的

学部学生の教育の成果を評価し、学習への意欲を高めることを目的に、本学独自の「学業優秀学生奨学金制度」を創設し、平成19年度から導入することとしました。

■ 奨学金給付の対象学生

奨学金給付の対象となる学生は、学部学生のうち、特に優秀な成績を修め、かつ、人物的に優れた者とします。（経済状況は加味しません。）

■ 奨学金等給付の内容

● 在学生

- ◇前年度1年間の成績により候補者を決定します。
- ◇奨学金は、学部2～4年次の学業優秀学生に対し授与するものとし、月額8万円を12ヶ月間（年額96万円）毎月送金します。
- ◇対象学生数は、当面、各学部各学年1名、合計12名としますが、将来的には、各学部各学年4名、合計48名まで拡げることを目標としています。
- ◇本奨学金は、本学の授業料減免制度や海外留学奨学金制度との併用並びに国（独立行政法人日本学生支援機構奨学金を含む）、地方公共団体及び民間奨学団体による給付と奨学金との併給を認めます。

■ 卒業年次生

- ◇1～4年次までの全ての成績により候補者を決定します。
- ◇対象学生数は、各学部1名、合計4名とします。
- ◇30万円程度の記念品を授与します。

【お問い合わせ先】

一橋大学基金事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL: 042-580-8888 E-mail: kikin@ad.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

卒業生

459名・3団体（77,446,261円）

ご寄付金額

100万円以上	50万円以上 100万円未満	50万円未満
23名	11名	425名・3団体
秋山富一 様 石川健一 様 磯部英明 様 大川征威 様 萩原道夫 様 角川 勲 様 梶原徳二 様 加藤武雄 様 寒竹 昇 様 久米 明 様 小林利雄 様 鈴木 喬 様 高橋 宏 様 武井久幸 様 辻 善夫 様 土屋五郎 様 利島雄之助 様 永井孝彦 様 仲野嘉一 様 速水 優 様 福田 厚 様 他2名	石山照明 様 大泉 潤 様 柏木芳郎 様 関島和夫 様 高原正靖 様 韭澤陽子 様 平井祥司 様 平野雅昭 様 蛭田政男 様 渡邊 彰 様 他1名	相原 誠 様 青池 潔 様 青木昭治 様 青木雅宏 様 吾妻新一 様 秋山栄司 様 龜山健太郎 様 秋山孟彦 様 浅岡 晃 様 浅水 修 様 芦谷政男 様 足立吉正 様 安倍英男 様 阿部 旦 様 天野 馨 様 新井道夫 様 有田浩之 様 安藤 進 様 安藤忠久 様 五十嵐 誠 様 五十嵐雄平 様 生田康介 様 池口徳也 様 石川昭彦 様 石川義敬 様 石田大輔 様 石丸芳樹 様 伊志嶺朝重 様 石綿 恒 様 磯 次男 様 五十川寛章 様 一木剛太郎 様 井戸武一郎 様 伊藤孝将 様 伊藤 通 様 伊藤俊也 様 伊藤智樹 様 伊藤 準 様 伊藤博和 様 伊藤義雄 様 井上幾久男 様 井上登志仁 様 今井正博 様 今泉博勝 様 岩崎 準 様 岩崎邦夫 様 岩間由皓 様 岩本治郎 様 印東秀夫 様 上野 紘 様 植村豊記 様 歌川 毅 様 宇田川勝正 様 宇田川敏夫 様 浦本義夫 様 枝廣正純 様 越後福雄 様 榎 純一 様



銘板色

【ブロンズ】

個人：30万円以上

法人：100万円以上

【シルバー】

個人：100万円以上

法人：500万円以上

【ゴールド】

個人：1,000万円以上

法人：5,000万円以上

【プラチナ】

個人：3,000万円以上

法人：1億円以上

（金額は累計）

蛭子義文	倉橋秀俊	正野雄一郎	田中慎造	花井清人	宮木修司
遠藤誠一郎	黒沢利明	白濁 大	谷口雅宏	馬場 亨	三宅朝太郎
大井征治	黒須正文	白木啓勝	田沼恭造	早川泰弘	宮崎一明
大石晃慶	小出駿哉	白木光磨	種田公二	早崎 寛	宮崎 幹
大石 繁	国府田 勇	城山貞治	田上道隆	林 修樹	宮崎恒彦
大内史之	河野文昭	進藤勝美	田上靖英	林 達男	宮副里香
大黒哲也	小塩 隆	新藤國雄	田村 稔	原田慎忠	宮本弘司
大島誓一	小芝 繁	進藤孝生	丹波達哉	阪西哲雄	向田真一
太田英一	小関隆志	神保次世	津田寿一	坂東正俊	村田正太郎
太田琢磨	兒玉浩生	新名宏志	津田浩之	比嘉繁昭	村田 博
大竹寿利	後藤 正	菅井淑行	土田久兵衛	樋口誠一	森川莫臣
大塚宣征	小林源二	杉浦英一	土屋 敬	久内莊一郎	森田明男
大沼正博	小林泰次郎	杉村 章	角田昭治	久留達夫	森田明男
大野章雄	小林俊郎	杉本和史	出島立夫	日野 大	門田伸一
大橋博行	小林 博	鈴置牧郎	寺田勝彦	檜山勝弘	八木 健
大林 宏	小林陽一	鈴木 昭	寺田佳征	平出三郎	安田結子
大森健司	小林吉文	鈴木堅司	樋田久樹	平岩寛治	安間龍彦
大森茂士	小此木 馨	鈴木 隆	田路健一	平岩益夫	山内稔彦
岡野理一郎	五宝清三郎	鈴木達朗	豊田次郎	平出浩一	山岸 新
岡本匡弘	小松美枝	鈴木 保	永井 等	比留間孝寿	山口剛広
小川拓也	小森 治	鈴木徹男	中川 訓	廣川幸男	山口真人
尾川真成	近藤早利	鈴木英晃	中沢義征	広島康雄	山崎 光
尾崎寿郎	近藤昭之	鈴木英夫	永島 宏	広瀬健太郎	山崎文彦
尾崎行久	斉藤昭男	鈴木 誠	中田敦之	廣瀬敏雄	山田幸雄
小夫淳示	齋藤主史郎	鈴木正光	中田謙司	広部史彦	山田成男
甲斐寅武	斎藤賢一	須永貞男	中田久志	深沢政彦	山西大洋
甲斐信好	斎藤雄二郎	諏訪 弘	仲野恒恭	深谷 渉	山部俊一
角 八郎	佐伯慎一	関谷正昭	中畑正照	深谷 峻	山本千里
樫崎規夫	酒井俊昭	瀬戸川 明	中村謙三	深谷光茂	結城隆成
梶田安弘	坂江正明	妹尾佳明	中村健一	福井八郎	与儀政昌
柏倉信吾	坂口裕一	瀬間 敏	中村 進	福井睦夫	横井岳志
梶原康孝	坂田秀三	芹沢弥太郎	中村 基	福岡雅幸	横須賀 淳
片山克彦	坂本憲司	匠瑩武夫	中村正董	福田 寛	横田 学
加藤 悟	坂元充幸	副島英雄	中山俊之	藤居 寛	義家紀男
加藤順市	嵯峨山由範	曾根 晋	中山 昇	藤井國士	吉川晋平
加藤典夫	嵯峨山芳康	大 公一郎	南雲和利	藤本厚造	吉川武明
兼定十起彦	相良達也	多賀正彦	名田 清	藤森直哉	吉田広一郎
兼松勝弘	佐川健太郎	多賀義昭	夏目 仁	星野一雄	吉田貞一
鹿俣謙一	桜田敏裕	高木菊次郎	奈良靖彦	星野 徹	吉田信彦
飯屋昭雄	笹沼武志	高野秀三	名和靖司	堀田義雄	吉田彦吉
河合 晃	佐次洋一	高橋晶夫	二階堂美彦	堀内俊助	吉田禎允
河合清久	佐藤 明	高橋悟郎	西 英智	堀江洋子	吉村尚憲
河口脩一	佐藤武彦	高橋貞男	西川幸則	増田 幸	好本圭佑
川島隆夫	佐藤 忠	高橋俊行	西田一茂	増田 修	米倉利一
川田洋一	澤村和男	高橋理英	西森気晴	増富義弌	米増 明
河西幸穂	品川継徳	高橋康夫	納富清孝	町田英一	鷺頭邦夫
神崎俊光	篠塚慶一	高橋裕司	野尻七郎	松井澄夫	渡辺健男
神田芳雄	篠宮 勲	高藤悦弘	野萩 互	松田信弘	渡邊太郎
菅野功司	柴田 亮	武井忠之	野村勇雄	松原浄也	株式会社コーセイ
菊島正雄	地引徳治	竹内 博	李本光弘	松見捷郎	代表取締役 柴山久慶
菊地和彦	渋谷重紀	武田一男	橋本昭次	真山泰男	昭和61年卒有志一同
喜多村禎勇	嶋田英司	武田三千男	橋本 慎	三笠龍平	淡交会
木村 幹	清水 徹	竹中裕支郎	蓮見俊夫	三木治彦	他29名
木村雅美	清水 仁	竹林憲明	長谷川 健	水垣志郎	
工藤元哉	清水政男	田崎謙一郎	長谷川敏彦	三嶽恭二	
工藤武雄	城 裕也	田中 章	長谷川暢洋	道本悦生	
窪田二郎	東海林 一	田沢 治	畑井文明	三橋秀方	
久米一男	生島 浩	田中 丞	服部清太郎	宮内康夫	

在学生の保護者

48名
(2,110,000円)

阿部昭史	中井作充
飯島眞二郎	永井和敏
磯部孝文	中澤富士夫
磯村幸夫	中本佳子
稲見勇一	仁平 洋
今関慎一	野田洋子
宇佐美隆生	橋本和夫
大田輝男	長谷川茂男
大塚一太	長谷川純一
大西信樹	服部和隆
岡野 進	濱野 章
小野塚則幸	藤枝政男
河上清峯	別宮裕三
楠井隆史	丸山一康
坂内和夫	三浦勝美
櫻田和之	三浦耕造
島田 稔	森永 康
杉本一芳	横山利弘
鈴木 修	吉崎美樹
田邊伊作	若槻寛三
千々岩三夫	他 6名
土橋直樹	

卒業生のご家族

2名
(40,000円)

板谷朋子
野田 實
一橋大学消費生活協同組合 理事長 渡辺雅男

その他一般の方

2名・1団体
(1,610,000円)

吉田信彦
吉田彦吉
吉田禎允
吉村尚憲
好本圭佑
米倉利一
米増 明
鷺頭邦夫
渡辺健男
渡邊太郎
株式会社コーセイ 代表取締役 柴山久慶
昭和61年卒有志一同
淡交会
他29名

本学役職員

34名
(4,500,000円)

第2回ホームカミングデー開催のお知らせ

昨年の第1回に引き続き

今年はさらに盛りだくさんの企画を用意して

緑萌えるキャンパスに第2回のホームカミングデーの催しを実施します。

開催日：平成19年5月12日(土)

開催場所：国立西キャンパス

主なイベント

◆記念式典	大学貢献者表彰
◆記念講演会	名誉教授 篠原三代平 先生 (平成18年 文化勲章受章)
◆福引抽選会	
◆学生参加行事	応援部、学生音楽会、 一橋祭運営委員会(キャンパスツアー)、 茶道部、華道部、淡成書道会発表 ほか
◆図書館記念展示・館内見学	一橋大学の学問史およびコレクションの紹介を 中心とした記念展示を開催します。

学長ご招待者

すべての卒業生の皆様を歓迎致します。なお、会場の都合上、本年度は下記の周年に当たる方々を学長ご招待と致します。

- 昭和27年卒業(卒業後55周年目)、
 - 昭和37年卒業(卒業後45周年目)、
 - 昭和47年卒業(卒業後35周年目)、
 - 昭和57年卒業(卒業後25周年目)
- および各年次学部卒業生と同年代に入学された
OB・OGの方々。
ご家族も是非ご一緒においでください。

なお、ご招待年次以外の皆様ご参加の場合は担当までご連絡ください。

詳細はホームページにて随時お知らせします。

<http://www.hit-u.ac.jp/> をご参照ください。

[お問い合わせ先]

一橋大学総務部総務企画課 TEL:042-580-8010 FAX:042-580-8006

一橋大学広報誌「HQ」

〈編集発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長(社会連携・財務担当) 山内 進

〈編集員〉

言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科助教授 松井 剛

経済学研究科助教授 福田泰雄

法学研究科助教授 山田 敦

社会学研究科教授 足羽與志子

国際企業戦略研究科助教授 大上慎吾

経済研究所助教授 阿部修人

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉

株式会社情報研究社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学学長室広報担当

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel:042-580-8032 Fax:042-580-8016

<http://www.hit-u.ac.jp/>

koho@ad.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。

一橋大学学長室広報担当 koho@ad.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の

無断転載はお断りします。

● 広告掲載お問い合わせ先
一橋大学学長室広報担当
042-580-8032

編集部から

休日に自宅の近所を散歩していたら、あちらこちらで梅が満開でした。場所によっては、すでにかんりの花びらが散っているところも。この少し早すぎる陽気を素直に喜べないのは、映画「不都合な真実」のせいばかりでもありません。みんなが「これ、なんかまずいよね」と思いながら、今日明日どうにかなるというものではない。陽だまりでまどろむ猫を見ながら、「お前どう思う」と声をかけても答えは返ってきません。

大学改革もまた同様。「なんかまずい」のだけれど、今すぐとりかえしのつかない状況となるわけでもありません。先頭に立って改革なんてやるとみんなに嫌われるし、労多くして功少なし。でも、あれとかこれとか、もう手をつけないと本当に「まずい」のでは。

「お前どう思う」とまた猫に声をかけると、「あほか、お前は」という顔をされてそっぽをむかれました。ごもつとも。陽だまりでぬくぬくしていても何も起こりません。重い腰をあげるとしましょう。(大猫)